

COD : BOCWの主人公がド
ルフロ世界へ

東ドイツ空軍航空部隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アラージュ・ガデイヴァーに裏切られ、殺された傭兵……もといベルは、気がついたら車と共に森の中に居た

ベルは自分のスキルをいかして、この世界を無事生き残れるのか？

(再投稿です)

目次

第一話	始まり	1
第二話	出会いと救出作戦その一	6
第三話	出会いと救出作戦その二	11
第四話	ボス戦 処刑人(エクス キューショナー)	15
第五話	機密情報収集と遭遇	19
第六話	M16A1と共に	24
第七話	思い出す過去	28
第八話	再会	33
第九話	ボス戦 代理人(エージェン ト)	37
第十話	基地へ、それと演習	42
第十一話	ベル、機械に変えられるみ たいです	48
第十二話	強化と極秘情報	54
第十三話	初任務	59
第十四話	制圧戦とベリコフとの再会	65
第十五話	制圧戦とベリコフとの再会	70
第十六話	帰還と基地防衛戦	74

第一話 始まり

トルコ　トラブゾン空港に続く道

「飛行機はトラブゾンを発つて、ドゥーガに降りる。分かってるな」

アラーシユ・カディヴァー。イランのテロリストである

そして、今はトラブゾン空港に向かっている最中である

するとアラーシユが

「実はな、ペルセウスはそこには居ない。この傭兵どもは、生きてドゥーガを出られないだろう」

衝撃の事実だった

「まず森に死体を捨てる。それからベルリンのヴォルコフに兵器を送る」

淡々と言うアラーシユ

「そして、ソロヴェツキーに飛ぶ」

恐らく、最後の目的地であろう

アラーシユの隣に座ってる傭兵…ベルは黙って聞いていた

そしてアラーシユは車から降り

「だが、お前には別の計画が。ペルセウスに気に入られていたよな」

そしてアラーシユは

「ライバルは潰しておく——」

銃を抜いて発砲した

ダンドン!!

そして運転手も

「グワア！」

射殺された

「……？」

目が覚めると、ベルは車の中にいた

「……？」

そして、射殺された筈のベルは自分の体を確認する

撃たれて死んだと思っていたが、いつの間にか傷は癒えていた

運転席で死んだ筈の傭兵も消えていた

「……………」

ベルは車から降り、後部座席を調べた
すると出てきたのは

AK-74M、MP5A5、何故かM1911（サイレンサー付き）があつた
そしてモロトフ・カクテルがあつた

武器、弾薬が豊富にあつた

「……………」

ベルは弾を装填して、いつでも撃てるようにする

そして、運転席側に移り、車を運転した

ベルは森の中を運転していた

「……………」

普段無口だが、少しだけにこやかな感じだった

テロリストマスク（で良いのか？）を外したベルはロシア人ぽかった

そして車を走らせていると

ダダダダ!

発砲音が聞こえ、ベルは音がした方にハンドルをきった

銃声がした所では、404小隊のH&K416が鉄血人形を迎撃していた

「くっ………数が多い!」

仲間ともはぐれ、孤立状態となった416

そして弾も切れ、終わった———と思っていたが

「……………?」

いつまでたっても被弾した気配がしなかった

そして目を開けると

「……………え!」

一台の車が防御していた

ベルはギリギリ滑り込む事に成功した

「……………？」

始めて見る敵に驚いていたが、躊躇なく攻撃した

ベルはMP5で応戦して敵を殲滅した

「……………？」

ベルは車を降り、敵を確認すると、血を流していなかった。その代わりに配線みたいなのが見えていた

そして敵を確認して、敵の生存者まM1911で止めをさした

すると後ろから

「手を挙げなさい」

第二話 出会いと救出作戦その一

「手を挙げなさい」

と言われ、ベルは素直に手を挙げた

416はベルからAK-74等を取り上げ、モロトフ・カクテルもボツシュートされた

「凄い武器持つてるね……こんな数の武器、何処から仕入れたの？」

「……………」

ベルは車に指を指した

「……載せてあったのね」

「……………」コクツ

「……喋れないの？」

「……………」

少し奇妙な会話が続いた

「……………乗せてくれる？」

「……………」コクッ

ベルと416は森の中を走っていた

「……………」貴方の名前は？」

「……………」

ベルは助席のダツシユボードを開け、自分の身分（偽造）を渡す

「名前は……………」ベルって言うの？性別は男性、所属は……………」元KGB?」

「……………」コクッ

最後のKGBが引つ掛かっている416だが、特に気にしなかった

「ねえ……………」私の仲間なんだけど……………」助けてくれない？」

「……………」

「他の皆ははぐれたり、捕まったりしてる状況なの……………」お願い！助けて！」

ベルの返答は

「……………」コクッ

Yesであった

「それで、作戦はあるの?」

敵拠点の前に車を止め、ベルはTYPE63（中国のライフル）で監視していた

ベルは爆薬を渡す

「これは……C4?そんなのも持つてるのね……」

そして、ロシア語ではあるが、『必要な時に使え』と書いてあった

「まずは……警備の排除。塔に一人、門に五人。排除しましょう」

「……………」

バシユン!

「塔の一人を排除。残りを始末しましよ」

バシユン!バシユン!

「元KGBとは思えない腕ね……」

「……………」

ベルは先に先行した

「凄いわね……」

と倒した敵を確認する

「ベルは知らなかったね。これは『鉄血人形』って言うのよ」

ベルは鉄血人形を調べる

そして、配線を弄っていた

「ベル？何をしてるの？」

「……………」

（鉄血人形の配線を……一体何をしてるの？）

すると

「……………」

その鉄血人形が起き上がった

「!？」

416は警戒するが

「……………」

「……………」

何故かベルと鉄血人形がコクコクしあっていた

「……………まさか、交渉してるの？」

そして

「……………」コクッ

「み……………味方に着けることが出来た……………凄い」

「……………」コクコク

ベルと鉄血兵は基地の中に入っていった

「あ！ちよつと待って！」

「施設の前にも鉄血人形……………警備が硬い」

「……………」

「何か策はあるの？」

とベルは手信号で合図した

狙われにくい所から攻撃せよと言う手信号であった

狙われにくい所は沢山あった。

そして、味方に着けた鉄血兵と416は配置についた

ベルは配置についたのを確認し

「……………」

攻撃の合図を出した

第三話 出会いと救出作戦その二

奇襲の合図を出し、ベルは突撃する

「……………」

ベルはスライディングでリツパーを倒す

そして、銃で殴ってこようとすするリツパーに対して

「……………」

ドサツ

襲いかかったリツパーを盾にして、AK-74を撃ちまくった

ダカダカダカダカ

カチツ!

弾が切れるとベルは手榴弾（ピンを抜いた）をリツパーに持たせ、敵が密集してるところに押した

リツパー達は突然の事に対応出来ず、爆発。周りに居たリツパー達も吹き飛ばした

「す……………凄い……………」

416はベルの戦闘能力の高さに驚いていた

ただの傭兵……では話はずかないだろう

そして、あっという間に敵は瞬殺されていた

「……………」(絶対にこの人は敵に回してはいけない……………!)

と416は心の中でそう思った

現在、敵施設内

ベルと416はAK-74にフラッシュライトとサプレッサーを着け、施設内を歩いていった

味方になった鉄血兵は見なかったから恐らく倒された模様

あいつは良い奴だったよとベルは思った

『ベル、隠密行動をするの?なら、サプレッサーを頂戴?』

416に言われたが、ベルはサプレッサー切れしてたから、空き缶を渡した

『空き缶……………?これで音が抑えられるの?』

ベルは頷いた

(空き缶とかペットボトルでも実際に消音能力は有ります)

416は半信半疑ではあったが、ベルは気にせず進んだ
そして進んでいくと

「ハアー……チツ、グリフィン共の襲撃じゃねえなら誰だ？」

何かラスボス感が有りそうな女性の声が出た

「しかも、外の音も全然しねえ……もう侵入されたとしても言うのかよ」

どうやらめつちや不機嫌気味のようなだとベルは思った

そいつは廊下を歩いて、ベル達の目の前を通ってどっか行った

「ふう……心臓に悪いわね……」

「……」

ベルは微動だにしていなかった

そして、とある一部屋を見つけた

ベルはこのドアに見覚えがあった

「……」

赤く、レバーを横に上げるタイプのドアであった

そしてそれを開けると

「……うう」

拘束されていた人形を発見した

「大丈夫!？」

416は戦術人形に駆け寄る

「うう……救助部隊？」

「いえ……でも、仲間を助けに来たわ。他にまだいる？」

「……私だけ。捕まったのは」

「そう。分かったわ。ベル！医療キットとかある!？」

ベルは近くの棚にある医療キットを投げ渡す

「ありがとう！そう言えば、名前を聞いてなかったわね？」

「……スコープオンだよ。助けてくれてありがとう……」

同時に、怪我してる所も包帯で止める

「よし……これでOK……後はどうするか……」

と考えていると

「お前らか、忍びこんだ奴らは」

さっきの女性だった

第四話 ボス戦 処刑人（エクスキューショナー）

「……………」

「エクスキューショナー……………」

ベル達があつた敵はエクスキューショナーである

416は『厄介な敵に出会つた…………』と思つてゐるが、ベルからすれば『??????』である

「おいおい、その人間は何だ？ 傭兵ぼいが……」

ベルを指差しながら言う

「……………」

「何だあ？ 無口かあ？ 何か喋れよ〜？」

しかし、ベルは相変わらぬ無口であつた

するとベルは、416とスコープピオンの前に出て、AK-74を構えた

『絶対にやらせない』の意思表示である

「へえ…………人間風情がねえ…………ならそれに応えてやろうじゃねえか？」

とエクスキューショナーは背負っているソードを構え

「行くぜ！」

ベルに襲いかかった

「……………！」

ベルはギリギリでかわし、体制を立て直す

「へえー、あれをかわすなんてな…………お前一体何者だ？…………つて、喋らなかつたな」

「……………」

そしてまたエクスキューショナーからの攻撃が来るが、ベルはかわして、エクスキューショナーが持つてるソードを攻撃した

「チツ！」

しかし、防がれてしまう

「おいおい？まだ行けるだろ？」

ベルはモロトフ・カクテルをぶん投げ、エクスキューショナーを遠ざける

「うお!! 火炎瓶持つてるのか!…………やってくれるじゃねえか」

とエクスキューショナーも本気を出してきたようだ

ベルはAK-74の先端に銃剣をつけ、格闘に備えた

「ウオオオオオ!!」

エクスキューショナーが突っ込んで来た

ベルは銃剣でエクスキューショナーのソードを吹き飛ばし、衝撃で倒れた所に銃を向けた

「……チッ！人間の癖してやるじゃねえかよ。……今日の所は諦めてやる。だが次は覚えてろ……！」

と言いながら去って行った

「……………」

ベルはボス戦に初めて勝利した

「あっ……………ベル」

416とスコープイオンは車の中に退避していた

その間、鉄血兵達が撤退していくのが見えた。恐らく、ベルは勝利したのだろう

「……………」コクッ

「スコープイオンも無事よ。今はぐっすり寝てる」

そして、救助を呼ぶ事になり、奪還した基地の通信を使う際

「……………」

ベルはあったパソコンを使った

カタカタカタカタ……

そして英語で書かれては居たが、とある情報を発見した

「……………これは！」

416も驚愕した

ベルは、鉄血の機密情報の入手に成功した

しかも、作戦行動、新型の鉄血人形のプロフィールまで入手に成功した

「ベル……………貴方何者なのよ……………本当に！」

とこれのコピー資料を入手し、後は出た所が分からないよう暗号化した

そして、ヘリが到着し着陸しようとした時

ドカーン!!

「……………！」

攻撃を受けた

第五話 機密情報収集と遭遇

『攻撃を受けた！くそ！墜ちる！』

二機の内、一機は森に墜落した

「ベル！急ぎましょう！」

ともう一機のヘリが着陸して、416とスコープイオンは搭乗したが

「……………」

ベルはヘリの扉を閉めた

『!?ベル！何をしてるの!?』

ベルは口パクではあるが

『大丈夫、必ず帰ってくる』

と言った

そしてヘリはそのまま離陸した

ベルは、ヘリを見送ると、直ぐに行動に移した

鉄血の機密書類のコピーとパソコンをバックにぶちこんで、何一つ証拠を残さないようにした

そして、そのまま外に出て森に隠してあったジープに乗って、戦闘地域を脱出した
鉄血兵はそのまま基地を再制圧したがベルは置き土産を基地に置いていた

C4爆弾を部屋に置いていた

ベルは遠隔でC4を起爆した

カチッ

ドカーン!!

再占領した基地をベルは爆破して、壊滅に陥れた

ベルは戦闘地域から離脱し、森の中を走行していた

そして走って行くと、廃墟を発見した

キイツ

「……………」

ベルは怪しげな廃墟に到着し、AK-74Mを構え、もしもの時に備えた

「……………」

ドアがあるが、どうも怪しく感じていたベルは
ガシヤアアン!!

窓ガラスを割って派手に突撃した

「……………」

ベルは、ドアを確認すると

「……………」

やはりと言う顔をしていた。

ドアにはブービートラップが仕掛けられていた

ベルは手際よくトラップを解除し、役に立つ物だとポケットに入れる

腹が減ったベルは、机で飯を食べ始めた

現在食べてる物

缶詰め……………×3

(何故かある) ウオツカ×1

である

「……………」ムシヤムシヤ

食糧は車の中にあつたため、食べ物には困らずに済みそうであつた

コツコツ……

うしろから歩く音が聞こえるが、ベルは敢えて気にせず、食べ進めた

何故なら、割れた鏡のガラスが少し残つてるからだ

そして、良い範囲で近づいた所で

「……………」

M1911を構えた

振り向くと、M16を構えた女性が居た

「ほう……気づくとはな。只の傭兵つて訳では無さそうだな。鉄血の追手でも無さそう
だ」

「……………」

ベルと女性はそのまま構え続けたが、ここは大人しくベルが銃を捨てた

(銃を捨てた……？だが、好都合だ)

女性はベルから銃をボツシュートした

「そうだな……お互い名前を知らないじゃないか？私はM16A1だ」

M16……懐かしい名前だとベルは思った

確かベトナム戦争で同じ銃を握つたと昔に戻つていた

「お前の名前は？」

と聞かれたが、どうしようかとベルは思った
喋ろうにも喋れないのだ

「……話せないのか？」

しかし、口パクで

『ベル』

と言った

第六話 M16A1と共に

ベルがたまたまM16を見つけて数時間後

「プハア……やっぱり酒は美味しい……ベルは何を飲んだ？」
隣で酔っ払ってるM16を横に、ベルはウオツカを飲んでいた

「ベルはウオツカ飲むのか……良いセンスしてるな」

「……………」

ベルは無口にウオツカを飲んでいた

ベルも少し酔っていた

するとベルは何か思い付いたように車に戻った

そしてバックを持ってきて、パソコンを開いた

「……………」

「うん？何を見てるんだ？」

M16も気になって見ていた

「……これは、鉄血の情報なのか!？」

「……………」コクッ

M16も驚いた。何故、ベルが鉄血の情報を持っているのか、知りたい事が沢山でき
てしまった

それと、とある封筒をM16は見つけた

「これは何だ？」

「……………」

ベルは無口ではあったが、見てみれば良いとの顔をしていた

「……………」これは

M16は鉄血工造の極秘情報の書類を見た

新しく作られる鉄血側の人形の名前、性能、そして現在占領している鉄血の占領地域

など、完全極秘情報であった

「……………」お前、一体何者なんだ？」

「……………」

ベルは近くにあった紙に英語で書いた

書いてあったのは

『ただの傭兵』

と書かれていた

「傭兵……か、本当にそう言えるのか？」

「……………」

追い詰められるベル

「まあ……しかしこの情報は貴重だ。私と共に来てくれないか？」

「……………」コクツ

付いていけない理由が無いため、ベルは頷いた

「お前も、鉄血のリストに入るのか」

「……………」

「まあ、ベルなら大丈夫そうだな。その時は私も頼ってくれ。これも何かの縁さ」

「……………」

その話は終わらせ、ベルはウオツカを飲んだ

「プハア……酒は美味しいなあベル？」

とM16が酔っ払っていた

「……………」

ベルは相変わらず無口だが、少々呆れているような感じではあった

「さて……今日はもう暗いからな。寝ようと言いたいが、鉄血が来ないとも限らない。

「ここは交代交代で監視しようじゃないか？」

ベルは頷いた

まあ、最初はベルが監視する事にはなったが

ベルはM16を起こすことなく、夜中は一人でぶっ続けの監視を行った

M16からは怒られ、ベルは正座をして黙って聞いていた

「……そんなに私が頼りないのか？」

「……………」

ベルは首を横にふった

まあ、ベルのそれなりの優しさ何だが

「はあ……まあ、その優しさは嬉しいが、もう少し私を頼ってくれ。分かったか？」

「……………」コクッ

ベルは頷いた

「さて、これから私達はどうか……M4達が無事だと良いが……」

「……………」

第七話 思い出す過去

ベルとM16は車に乗って走行していた

因みにベルが運転である

「で、行く宛てはあるのか？ベル」

「……………」

「行く宛ては無さそうだな……………」

無口で無反応であることは宛ては無いとM16は判断した

「あそこに廃墟があるな……………ちよつと行ってみるか」

ベルは廃墟の前で停止した

ベルはバッグを取り出し、廃墟の中に入っていった

数分後……………

「ベル、着替えたのか？」

「……………」コクツ

ベルは傭兵の格好から何処にでも居そうな一般人風の服に着替えていた

「似合ってるじゃないか。それと、そのマスクを着けたらもうテロリストに見えるぞベル？」

本当に似合ってるのか？とベルは思ったが、これはセーフハウスの時に着ていた服だった

(アドラー達は……大丈夫なんだろうか……)

あの尋問で、アラーシユに殺された時も、ペルセウスの会議に参加したことも……全てを思い出した

目を覚ます筈がアラーシユに殺された時に逆戻りしこの世界に居た

今頃本当の自分の身体は植物状態なんだろうな……とベルは思いつつあった

場所は変わって西ベルリンにあるセーフハウスでは

「心拍は安定してるけど……まだ意識が戻らないわ」

「クソ、ベル！しっかりしろ！まだ終わっては無いぞ！シムス！ベルの状態は!」

「ベルは死んではないな。だが……何かに入り込んでるんだ……何か……別の何かに」

「そんな事があるのか？」

「分らない。だが、調べてはみる」

とシムスは調べに向かった

「ベル、聞いてなくても、これだけは思い出せ」

「俺達には使命がある」

『俺達には使命がある』

「……………」

ベルの脳裏に確かに聞こえたアドラーの口癖でありキーワードでもあった台詞だった

(確かにアドラーの声が……………意外と心配しているのかもな……………)

ベルは久々のアドラーの声で少しフリーズしていた

すると

「ベル？」

M16に声を掛けられた

「……………」

「大丈夫か？何かあったか？」

「……………」フリフリ

『何でも無い』と返した

「そうか、だが何か困った事があるなら私を頼ってくれ。いつでも相談に乗るぞ？」

「……………」コクッ

ありがとうの意を示したベル

それと同時に、アドラーに見守られているような気がした

(必ずこの世界で生き抜いてやる……………！)

そう心の中で誓った

「さて……………そろそろ行くかベル？」

「……………」コクッ

二人は車に乗り、場所を移動した

「なんとか着いたな。途中鉄血が居たが、ベル。全員轢くのはどうなんだ？」
「……………」

着いたのは建物が殆ど無い場所であつた

第八話 再会

車を走らせ続けて二十分後

見えた先の道は鉄血だらけであった

「チツ……鉄血が何故こんなところに……」

「……………」

ベルは右の道の坂に車を止め、降りた

「ベル、気を付けろよ。いくら私達でもあの数の敵を相手するのは困難だ」

ベルはナイフを三本と63式自動歩槍とM1911（どちらともサプレッサー付き）を出し、息を潜めた

『なあ、大丈夫なのか？ベル』

『……………』コクツ

最悪交戦する場合は逃げるのみとM16に伝えた

『了解』

鉄血兵のリッパー達はそのまま進んでいった

ベルは63式歩槍を構え、監視を続けた

リッパー軍団達は、そのまま消えていった

「ふうく……とても緊張したぞ……だが、交戦には至らなくて良かった」

ベルは特に緊張した表情はしていなかった

そりやもうシュタージが居るところも、誰にも気づかれずにラザーの所まで行った
り、ウクライナ・ソビエト共和国にある極秘施設にも気づかれずに入ったりした

中に入ろうとピッキングしたときにソ連兵が出て来て焦ったが、ウツズのお陰で助
かった

あの時は本当に感謝しているとベルは思った

「急ぐぞ、更なる増援が来ない内に」

二人は車に乗り、リッパー軍団達が歩いて来た道を進んでいった

タカタカタカタカ!!

「発砲!?!」

「……………!」

ベルは車を止めたのは、廃墟となった街中であつた

その先に見えるのは

「エージェント!?!とM4!」

ベルはAK-74Mを持ってエージェントに突撃した

「ベル!?!」

ベルはエージェントに体当たりして、何とかM4を守れた

「ぐっ!何ですか貴方は!?!」

ベルは一旦離れ、構える

「貴方は……そうですか、エクスキューションナーの情報は正しかったと言うことですか」

「……………」

「私は、エージェントと申します。貴方の噂は聞いておりますよ?hitman?」

「……………」

「フツ、知りませんでしたね。その名前は私達鉄血が付けた貴方のコードネームです」

(hitman……殺し屋、暗殺者って意味じゃ……いや、案外合ってるのかも?)

「では、早速ですが……」

「貴方には死んで貰います」

ダダダダダ!!

「!!」

ベルは右にかわすと、スモークグレネードで姿を消した

「ふふっ、スモークで立て直しましたか……ですが、貴方の位置など分かりますよ？」

と廃墟の建物を発砲した

そこにはベルが居り、何で解るんだ？と疑問を浮かべつつも、ベルは63式自動歩槍で応戦した

「貴方は、そこら辺に居るような傭兵とは違う……だからこそ、貴方を始末します」

「……………！」

第九話 ボス戦 代理人（エージェント）

「隠れていては何も始まりませんよ？早く出て来て下さいな？」

「……………」

ベルは建物を盾にしてエージェントを攻撃しているが、相手の方が強かった

丁度良くライトマシンガンがあれば……！と思っていると

『ベル、これを使え』

と何処かで聞いたことある声が聞こえた

（今の声……ウツズか!?!）

とその声と同時に近くにあったのが

（M60……！ありがとなウツズ！）

ベルはM60を取り、エージェントのサブアームを攻撃した

「!?成る程……サブアームを攻撃してきましたか……人間にしては、やるではないですか」

エージェントの戦力は今の銃撃で低下した

「片方しか撃てない……」

「……………」

ベルはその言葉を聞いてナイフを抜いてエージェントに体当たりし、馬乗り状態となった

「……ふふつ、わたくしの負けですわね」

「……………」

ベルはナイフでいつでも刺せるようにする

「最後に聞いてもよろしくて？」

「……………」

「……貴方は何者なんですか？」

ベルはエージェントの耳に近づけて小さく言った

『只の傭兵だ』と

「只の……傭兵ですか……ふふつ、面白い人間なこと」

そしてベルはエージェントの目にナイフを刺す——

「……………」

エージェントはいつまでたっても来ない痛みに違和感を覚えた

目を開けると

「!」

ベルはエージエントの目ギリギリの所でナイフを止めていた

「な……何故……!」

「……………」

ベルは右手の拳を挙げた

それを察したエージエントは

「……………貴方はつくづく面白い人間ですね」

と同時にエージエントは意識を失った

「……………」

「ベル!大丈夫か!」

M16に心配されたが、ベルは大丈夫と伝える

「そうか、それとエージエントは……」

ベルはエージエントを右手で引きずっていた

「……………せめて持て」

「……………」

とまあ、幹部を倒して気絶させて無力化させたのは凄いことだろう

「それと、私の妹だ」

「M16姉さん……」

さつき言つてたM4つていう名前か

「あの……M4A1と言います。M16姉さんを助けてくれてありがとうございます
！」

とペコツとした

「……………」

ベルはM4A1の顔を上げる

「……………」 コクコク

「すみません……それと、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「……………」

小声で『ベル』と名乗った

「ベルさんですね。分かりました」

（さん付け……初めてそれで呼ばれたよ？）

少々困惑したベルだが、慣れていくしかないなと思つた

「それで、他の仲間とは連絡が取れたのか？」

「はい。皆無事みたいです。ここにヘリが来るみたいです」

第十話 基地へ、それと演習

へりは数分後に到着した

「……………」

ベルはへりになってベトナム戦争以来だなど思いつつも搭乗した
尚、エージエントを肩に背負って

「ふう……………これで基地に帰ることができます」

「M4、そこはベルのお陰だぞ？」

「分かってますよ……………」

「……………」

基地へ向かっている四人（エージエントも合わせて）

ベルは未だに気絶しているエージエントを見る

「スウ……………スウ……………」

(……本当に鉄血の幹部なのか？完全にメイドだなこりや)

エージエントの寝顔を見ながら心の中でそう思った

「今日一番の手柄は、ハイエンドモデルを捕縛した事だな。しかもエージエント」と、もう少しで基地に着きます」

へりは基地へと到着し、着陸した

とまあ、降りたけど早速捕まったよ

(まあ、仕方ないかな……)

こんな状況でも落ち着いているベル

静かに待っていると

「すまない、待たせた」

髭をはやしたロシア人が来た

「……………」

「ふむ……聞いてはいたが、本当に無口なんだな。私はベレゾヴィツチ・クルーガーだ。お前の名前は聞いてはいる」

「……………」

「それとな、救助した戦術人形達からお前は戦闘能力は高いと聞く。それでお願いがあるんだが……」

「……………?」

「この部隊に入らないか?」

ベルは頷き、了承した

「そうか、ではこれから宜しくベル」と握手を交わした

ダン!ダン!ダン!

「……………」

ベルは射撃場で自分の射撃精度を確認していた

63式自動歩槍(スコープ無し)で狙いは正確かを確認した

ベルはリロードをして再び発砲した

ダン!ダン!ダン!

「頑張ってるな」

振り向くと、M16が居た

「殆どヘッドショットが多いな……スコープ無しで」

「……………」

「そうだ。この後、演習があるんだがベルも参加しないか？尚、敵役でだが……」

「……………」コクッ

ベルは直ぐに了承した

「……………」

現在絶賛AR小隊に集中放火を食らってるベル

出たら当たるし、このまま隠れてても面白くないし（↑おい？）どうするか考えていると

「……………」

予備のスモークグレネードを取り出し、相手の発砲が止むのを待った

すると、相手は発砲を止め、こっちに来る足音が聞こえたのを同時にスモークグレネードを投げ突撃した

A R 小隊

「ここまで追い込んでいいるが……ベルもしぶといな」

ベルと交戦はしているが、ベルの方が苦戦していた

とベルから音沙汰が無くなった

「皆警戒して。もしかしたら突撃してくるかも知れません」

するとS O P IIが先行した

「S O P II！警戒して！」

「分かってるよ！でも、相手も勝ち目は……」

と同時にスモークグレネードが投擲された

「S O P II！戻って！」

スモークの中から人影が見えた。

それがベルだった

ベルはスモークの中を突撃し、S O P IIのライフルを投げ捨て、盾にして発砲した

「ムー！ムー！」

そしてベルはS O P IIをナイフで刺す（フリ）をしようとした時

「そこまでです！」

A R 1 5 に銃を突きつけられた

そのあとの A R 小隊は、反省会をしたそうなの

第十一話 ベル、機械に変えられるみたいです ベル（ど
うしてこうなった……）

AR小隊と模擬戦をしてから二日後……

「あつ、来た来た。待ってたよ」

ベルはとある女性に呼び出されていた

ベルが最初に思ったことは

何故、動物の耳がついているのか……と

「そんなに堅くならなくても良いよ？コーヒー飲む？」

ベルはいらないと伝えた

「ふーん……そうだ、私はペルシカリア。ペルシカでも良いよー」

この人は面倒くさがりやな性格なのかとベルは思った

「ベル、貴方にお願ひがある」

と近づいてきて

「少しだけ眠って」

ブチュ

「!？」

何かを注射されたベル。

それと同時に、ベルは深い眠りについた

Z Z Z z z z ……

2 0 0 0 Y E A R S L A T E R ……
(↑大嘘)

「……………？」ムクッ

ベルが起きた時に直ぐに異変を感じた

何と言うか……………身体が重いと言うか……………

「!？」

ベルは自分の胸部分を触ったら

「……………!」

実った胸があった

「あつ、起きたんだ。どう？調子は」

「……………」

ベルはペルシカを少し睨んだ

「まあまあ、そんなに睨まないで。これはベルの戦闘能力を上げるためでもあるから」

ペルシカは説明した

「どうやらAR小隊との模擬戦の映像を見ていたらしく、そこで見たベルの戦闘能力に興味を持っていた」

「……………」

「前の身体は……まあ、考えないで」

とベルは考えない事にした

「とまあ、隊長が整ったならそこにある服を着てね」

とペルシカは出ていった

ベルは服を着て、部屋を出た

自分の下着についてはあらかじめ用意はされていた

「……………」

ベルは廊下を歩いていると

「おつ……………誰だ？お前は？」

M16 だった

「……………」アセアセ

ベルはどう説明しようか迷っていた

自分がベルなんて信じられない気しかなかった

「……………誰だ？」

M16 もジリジリと近づいてくる

すると

「M16？」

ペルシカが居た

「成る程、そういうことか……」

ペルシカの説明で納得したM16

「戦闘能力向上の為に戦闘人形に変えたのか……色んな意味で凄いな」

「……………」

「戦闘はまだだけど、人間の頃に身に付いた戦闘能力が更に向上しています。それは保証する」

「……………」

「だが、どうやってベルだと言う？ M4達にもどうやって言おうか……」
と話していると

「M16姉さん、ここに居た」

M4が居た

「…………その人は誰？」

「あー、M4、驚かないで聞いてくれよ。この人はな……ベルなんだよ」

「……………あ？」

「ええええええええ!!」

「落ち着いたか？」

「姉さん、ありがとう……にしてもベルさんだなんて……」

「ペルシカに聞けば良いさ。……いつの間にかどっか行ったが」

M4はペルシカを探しに行った

第十二話 強化と極秘情報

「……………」

「ふうー……………やっと終わったあ……………」

ベルはカーリーナの書類を手伝っていた

「いやー、すみません。なかなか書類整理が終わらなくて……………」

「……………」

「やあ、ベル。調子はどう？」

ペルシカに呼び出されたベル

「今日はね、少し貴女に加えたいものがある」

と言われた

「じゃあ、そこの椅子に座って」

と言われ、ベルは座った

「よし、いいね。次にこれを耳に付けるから」

と何かのコードだった

「……………?」

「大丈夫、痛くはないから。問題は無い」

そう言われ、ペルシカにコードみたいなのを耳に付けられた

「……………」

ベルからの目線では、何かをダウンロードされていた

「……………?」

「そう。今貴女にちよつとした特技をダウンロードしてるの。いつか絶対役に立つから」

ベルにダウンロードしてるのは、言語スキルや暗号スキルを上げるものだった

それから二分後……………

「ダウンロード完了ね。何か変わったことはある?」

「……………」フリフリ

「良かったわ。これで、暗号化された無線や情報を簡単に手に入れる事が出来るわ」

「……………」

「では、ご苦労様。行って良いよ」

ベルは部屋から出ていった

ベルの部屋にて

「……………」

ベルは鉄血の基地から強奪したパソコンを見ていた

「……………」カタカタ

やはり暗号化された情報が多かった

たまにロシア語表記もあったが、ベルには簡単に読み取れた

ベルが一番気になっていたのが

「……………」

閲覧を許可された者以外は閲覧を禁ずる

鉄血工造で新たに作られたウイルス、『傘ウイルス』

このウイルスはグリフィン人形に対しての効果は高いものである

一番なのは、グリフィン人形を洗脳させ、鉄血の仲間にすることも可能である

このウイルスをグリフィン人形に対して使用する事で、更に作戦の効率性は更に上がるだろう

グレネードタイプも開発中

「……………」カタカタ

ベルは、傘ウイルスについて徹底的に調べ挙げた

やはり、グリフィン人形に対しての効果は高いようだった

感染すると、機能が破壊されてしまうようであった

尋問用ではあるらしいが、兵器に転用する計画らしい

それがあのグレネードタイプの奴だ

「……………」カタカタ

更に調べようとしたが

コンコン

『ベルさん、居ますか？』

M4A1が来た

味方とは言え、こんな情報は見せれなかったベルは暗号化させ、パソコンを閉じた
「大丈夫ですか？」

「……………」コクコク

「そうですか。それは良かったです。それとベルさん、作戦準備が有りますので、集合し
てください」

と言い、部屋から出ていった

第十三話 初任務

「……………」

「ベル、二時方向に敵。狙えるか？」

「……………」

M16とベルは味方を援護するため狙撃スポットに居た
ベルは63式歩槍で敵を狙っていた

「……………」

そして

「作戦開始だ。撃て」

ドシューン！

味方の進攻と同時にベルはスナイパーで援護した

敵は何処から狙ってるか分からんよなどベルは思った

「Oh……………凄い腕だな……………」

「……………」

M16はベルの腕に驚いていた

一発一発の火力が低い63式歩槍で殆ど全弾ヘッドショットで決めた

『姉さん、制圧が完了しました。作戦終了です。ベルさん、援護ありがとうございます』

M4からの無線が来た

「作戦完了か……M4達も頑張ってるな」

「スウ……スウ……」

「……………」

静かに眠っているSOPPIIをベルは膝枕していた

と言うのもSOPPIIの方から頼まれたんだが

ベルはSOPPIIの頭を撫でながら

『良い夢を』

とロシア語で言った

現在は森の中に居るベルとM16

命令で、とある教団を壊滅させろ。と言うのであった

この世界の敵は鉄血だけじゃねえのか。とベルは思った

鉄血だけではなく、ELIDに感染した人間、人類人権団体？みたいな連中は敵対関係らしい

「……………」

「あった。あれか」

見えた見えた。ホントに教会みたいだな。

「……………」

さーて、後は報告して、破壊命令が来たら攻撃するか

返答は『Yes』が来た

「……………」

ベルはRPG-7を構え、入り口に向けて発射した

ドシューン!!

「さて……………今日も教団の警備か」

警備兵が玄関前を警備していると

ドシュン!!

「!?何だ!あれh」ドカーン!!

「派手にやったなベル?」

出入り口は木っ端微塵にぶっ飛んだ

「……………」

「まあ、これの方がやりやすいけどな!」

ベルとM16は突撃を開始した

「教師様!ここは避難しましょう!」

「ぐっ…………!一体何処の奴らだ!」

「分かりません!とにかく早く退避s」バタン!

「なっ!何処から狙っt」ドシュン!!

ベルは信者を尋問していた

相手を間違えたな。お前達の目的は何だ？

「ふん！お前らに言うことなんて無い！」

あつそ……どうしても言わないんだな？

「そう言ってるだろ！」

ベルはナイフを構え

じゃあ、死ね

ベルはナイフで信者を滅多打ちにした

「おつふ……ベル、少しやり過ぎだな……」

全身血だらけのベル

「……」

「よし！このミツシヨンもクリアしたし、帰って飲もう！」

と言われ、基地に帰還後は、酒飲みに付き合わされることになった

「ふうーん、こいつがねえ……」

鉄血の基地では、幹部がベルの写真を見ていた

「捕まえたら、どうしてくれようかしら？」

とにやけながら言った

第十四話 制圧戦とベリコフとの再会

「ベル様、指揮官様がお呼びです。指令室に来て下さい」

G36に指令室に行くよう言われたベル

「……」コクッ

無言ではあるが、頷いたベル

「では、私はこれで失礼します」

と言い、部屋から出ていった

「来ましたか、ベル」

そう言えば、名前が分からなかったなどとベルは思った

「紹介し忘れていたね。私はイリーネ・ブタノワ。改めて宜しくねベル」

「……」ピシッ

ベルは敬礼で返した

「ふふ、そんなに硬くならなくて良いわよ。今日はただの挨拶ですから」
「……………」

「では、解散して準備してください」

イリーネ指揮官からの命令は、鉄血が支配している地域の奪還である

「今日も相変わらずか……………」

「ベル様、これを」

G36から無線を渡された

「……………」ペコッ

「……………」フリフリ

G36と無言の会話をした

『なあ、M4、あの二人の会話分かるか?』

『M16姉さん……………流石に能力者じゃないから……………』

「AR-15、あの二人はなにぶつぶつ言ってるの?」

「気にしない方が良いでしょう」

同じ頃、別の場所では

「ハアー……まさかこんな事になるなんてなあ……」

彼はデイミトリ・ベリコフ少佐。KGB将校ではあるが、CIAとも関係している”二重スパイ”である

「アドラー達は何やってんだろうな……特にベルは」

ベリコフはRPD軽機関銃とトカレフを持っていた

「ヘリの操縦して、次は陸の兵士として戦うのか……KGB脱出作戦を思い出すな」と昔の思い出に浸っていると

「あ？ヘリ……何でこんな所に」

ベリコフは上を見ると

「ヘリが二機飛んでるな……ハアー、特上のウオツカ飲んでえ……」
と言いながら歩いてヘリを追った

「ふむ、こここみたいですね」

この作戦にはグリフィン支援小隊も参戦するみたいだ

あの時助けたスコープオンも居た

そしてめっちゃ感謝された

ここでおさらい

ベルはスモークマーカー弾を持っていた

実は砲撃支援用のマーカー弾である

もしベルがこれを投げればロケット弾による攻撃が来るらしい

「ベル、それを使っても良いが、味方が居るところには投げないでくれよ?」

M16に注意されつつ、これを使う機会が投げればとベルは思っていた

「敵が予測以上に居るよ!」

『何!? 情報では敵人数は少なかった筈……! くそ!』

イリーネ指揮官は机を叩いた

「……………」

ベルはスモークマーカー弾を投げようとしたが

『久しぶりだなベル』

その必要は無かったようだ

「……………！」

ベルが上を見ると

『ハハッ！運が良いようだな。これより対地支援を開始する！』バラバラバララララ！！

第十五話 制圧戦とベリコフとの再会2

ベル達が交戦する一時間前……

「あのヘリを一通り追ったが……やっぱり相手の方が速いな……」

ベリコフはヘリを追ったが、追いつけずに居た

「うーむ……何か無いのか……ヘリでもあれば話は別なんだが……」
と言っていたら

「……お？あれは飛行場か？」

ベリコフは放棄された飛行場を発見した

「ヘリがありますように……」

と願って格納庫を開けると

「……わーお」

M i - 2 4、ハインドがあった

「さて……問題は動くかどうかだが……」

ベリコフはローター等を確認する

「レーダー……武装……ローター等……異常無し……燃料も満タンだ……こんなにラツキーとはな」

ベリコフは放棄された格納庫から武器が無いかを漁った

「えーと……AK—47、RPG—7、k r i g 6、H a u e r 77……ありすぎひんか？」

ベリコフはあるだけある武器を箱に詰め込んでハインドに載せる

「弾薬も銃器も詰め込んだし、あのヘリを追うか……」

ハインドを外に出し、コックピットに移った

「よし……出撃する！」

ヘリのローターが動き、離陸した

そして見つけたのが戦闘をしている場面だった

「……………！」

「救援ですか!？」

『ベル！俺が援護するから、仲間と前進してくれ！』バラバラバラ！！

鉄血が居た建物もベリコフが破壊した

『そう言えばロケット弾もあつたな。丁度良い敵が居た！発射！』バシユウウウ！！

ベリコフがロケット弾で攻撃を開始。リッパー達は吹き飛ばした

「す………凄………」

「にしてもあのヘリのパイロットは誰なんだ？ベルを知っていたが……」

「でも、あのヘリのお陰で前進出来る」

「さっすが〜！」

A R 小隊の各々はベリコフの腕に称賛を贈っていた

「行きますよ、まずはこの地域を奪還しましょう！」

G 3 6 が言う

その後の戦闘は楽なもので、ベリコフが殆ど敵を殲滅していた

グリフィン占領地域にて

ベリコフ搭乗のハインドは広場に着陸した

「……………」

「久しぶりだな、ベル……で良いのか？」

ベリコフが知ってるベルは男性だった筈だが、女性になっていた

「貴方は……？」

M4が聞く

「まあ……戦闘ヘリのパイロットだよ」

「助けてくれて感謝します。名前をお聞きしても……？」

「ああ、俺はデイミトリ・ベリコフだ。好きなのはMLBとウオツカ。階級は少佐ね」

「ウオツカ……」

「……………」↑同じ趣味仲間を見つけたM16

「……………」姉さん？」

「あ、いや。何でも無いぞM4」

『ほんとかなあ……』

『同じ飲み仲間を見つけただけよ……』

SOPHIEとAR-15がこそこそ話していたがM16には聞こえていなかった

ベリコフはあるだけあった弾薬をヘリから出した

武器も満載してあった

第十六話 帰還と基地防衛戦

現在ベリコフのハインドで基地に帰還している最中のベル達

「ベリコフさん……ですか？」

「ベリコフで構わん。何か用か？」

「ベルさんとはどういう関係なんですか？」

M4が聞く

「そうだなあ……簡単に言えば“仕事仲間”っていう関係さ」

「そうなんですか」

「しかしベリコフはこのパイロットなんだ？」

M16が問う

「そうだなあ……ソビエトのヘリパイロットだな。一応」

「一応？他にもなにかあるの？」

「聞いてみたいな」

SOP II とAR-15も気になっているみたいだった

「KGB……は知ってるか？」

「あの旧ソ連のか？ 私は一応知ってはいるが……」

「姉さん、知ってるの？」

「ああ。たまたま本で読んだことがある。KGB……昔の秘密警察だ。スパイも専門だ」

「ベリコフさんは……そこに？」

「俺の場合はちよつとややこしいんだよ。KGBともそうだが、CIAとの関わりもあるんだよ」

「CIA……しかし何故だ？ 二重スパイを？」

「……ある友が私の理念を変えたんだよ」

「……そういうことか」

「そこからだよ。私がCIAとの関係を持ったのは。ルビヤンカ・ビルのKGB襲撃はベルも参加してる。勿論私もだ」

「KGB襲撃……成果はあったの？」

「……まあ、皆無事に帰ってこれたさ。そこから先はベルに聞いてくれ」

「……………」

その時、一報が入った

『応……願……うー！鉄血……襲撃……受け……る……！応援……願……』 ザザザー

ノイズ混じりの無線が入ってきた

「……………」

ベルはAK-74を構える

「鉄血の襲撃か……！規模は分かるか!？」

『……………』 ザザザー

「無線が繋がらない……………」

「また戦闘だー！」

「SOP II、無茶はしないでよ」

「分かっているってAR-15」

「ハア…………」 ヤレヤレ

「見えた！あれか？M16？」

「間違いない。あれが基地だ！」

「どこかのバカがRPGなど撃ってこなければ良い『ピーー！ピーー！』くそー！そう簡単には行かせてくれないか！」

ベリコフはフレアを撒き散らし、回避する

「強行着陸するぞ！総員衝撃に備え！」

「全員掴まれ！」

ドシューン!!

「着陸成功……」

「みんな大丈夫？」

「私は。SOP IIは……ね」

「うげええええ……吐きそうだよ……」

SOP IIは吐きそうになっていた

「指揮官！無事ですか！」

「来てくれたの！よかったわ。くそ、どうしてこのタイミングで襲撃が来た!？」

「先程、ヘリで帰還して来ました！ベルさんの親友です」

「そう。その親友に感謝すると伝えて。それと戦闘の協力もできるか！」

「了解しました！」

第十七話 基地防衛とボス登場

「ベリコフさん！」

「M4? どうした? 今から地上支援をしようかと思っていたのだが」

「ああ……そのことなんです。協力を仰げないかと言われたんですが、必要ありませんでしたね」

「取り敢えず、ベルも上から射撃援護してくれるから、安心して。ただ、油断はしないように」

「分かりました。援護宜しくおねがいます！」

M4は走っていった

「さて……ベル、派手に暴れてやろうぜ。ウツズやメイソンが居たら、大喜びでやるんだけどな」

「……………」

ハインドは離陸した

「M4！遅かったな！」

「ベリコフさんが支援してくれます！」

「良かったわ。少し押され気味……！」

「さっすがー！鉄血を粉碎してくれる！」

グリフィン支援小隊も参戦し、基地防衛に掛かる

『敵の数は……めっちゃおるわこりゃ』

「……………」

ベリコフは上から戦場を確認し、敵の数は多いと見た

『こんな数はハインドだけで対応出来るのか……少し厳しいが、やってやろうじゃねえかこの野郎!!』

ベリコフは気合いが入っているようだ

ベルはヘリのドアを開け、RPD軽機関銃を構えた

『攻撃開始！』ダララララララララララ!!

「……………」ダダダダ!!

ベリコフは機銃を発射。地上に居るニーナムやリッパー達を撲滅していく

『ハッハ！見ろ！敵がゴミのようだあ！ハッハッハッ！』ダラララララララララ！！
「……………」

ベリコフが少しおかしくなっているがベルは上からRPDを撃ちまくる

『ベル、RPGも使つて良いぞ。弾薬も二箱分はあるからな』

ベルはRPGを持ち、弾薬装填をした

「……………」バシユウウウウ！！

リッパー達が集中しているところを狙い、爆散した

したでは、M4達が必死に応戦している所を確認した

『ベル！掴まれ！敵の反撃が来た！』

敵からも反撃されたが、ベリコフは華麗な操縦技術で見事躲す

『良し！一掃開始だ！くたばりやがれ！』ダララララララララ！！

ベリコフは再び射撃開始。それとロケット弾も撃ちまくり、敵を粉砕した

そして敵もあらかた片付き、地上からも敵は退きつつあると言う無線も入った

ベリコフも安心しきっていた

燃料もあと少しで切れる時に

スカン！！

ピー！ピー！

『警告音!? くそ! ローターが制御不能になりやがった!』

ハインドは落ちていく

『ベル! 衝撃に備えろ!』

ドカーン!!

「あ……あ? 大丈夫かベル……」

「……………」

「へりは……爆発しなかった……げっほ……耐えたんだ……」

ベルは先に墜落したハインドから降り、外を確認したとき

「お前らか。さっきのへりの奴ら」

……敵だなありやとベルは確信した

第十八話 ボス戦 錬金術師（アルケミスト）

「……………」

ベルは目を見開く。

そして最初に思った事は

身長でけえーである

「ハア……………にしてもとんだ拾い物をしたな？ ヒットマン……………いや、ベルが正しいのか」

どうやら自分の名前は知られているようだ

ベリコフは戦闘不能。理由？ 左足がポキッと逝ったらしいため、歩くことなど不可能

であった

「さて、どうする？ お前の仲間は戦闘不能で、救援が来るにも時間がかかる……………分かるな？」

まあ……………この状況でベリコフを置いてけぼりにする訳にはいかんし……………

「……………」

ベルはA K—74 Mを構える

「フツ……さあ、楽しもう！」

「チツ！意外と耐えるな！」

「……………」

アルケミストの動きに普通に着いてこれていたベル

前の身体と比べたら、歴然の差だった

身体能力が激的に向上していた

それとナイフ投げが得意になったのだが、四本同時に投げられると言うところも進化していた

ただ、ベルが惑わされていたのが

ヒュン！

「……………」

目の前から消えるということだった

そしてどこに居るか警戒している時に

ビュン！

「……………」

相手の攻撃が来るのだ

（やっぱり避けられるな……運が良いのか……それとも攻撃を察知して居るのか……あんな無愛想な表情してるから余計分からん……！）

ベルはここでモロトフを数本一気に投げた

「危ねえ……火炎瓶か、面白いな」

避けられてしまう

チツ……一気に投げれるとは言え、相手の方が早い……っていうか瞬間移動って卑怯すぎひんか？

「おいおい、火炎瓶を数本も一気に投げてきたりするのもどうかかな？」

比べたらどっちがマシだ？……っていうかこんな茶番は終わらせようや？

「フツ、最初からそう言えば良いものを……行くぞベル！」

アルケミストはベルに突っ込んだ

ベルは斧を持ち、突撃した

「フフ……どうやらお前の方が一枚上手だったようだな……」

ベルが勝った……とは言い難く、ベルも右手がやられていた

「……………」

「右手が死んでも、表情は変わらないのか……面白い奴だな。お前は……」

アルケミストも腕は完全に吹き飛ばされていた

ベルはM1911を構える

「……………」面白かった。また相手をしてくれよな……」

ダコオン!!

M1911の銃声が鳴り響き、アルケミストは機能停止した

「ああ……ベル……大丈夫か？」

「……………」コクコク

ベルはベリコフをハインドから引きずり出す

「ああ……ありがとう友よ……」

ベリコフを座らせ、救助を待った

その数分後に

「ベルさーん！ベリコフさーん！」

M4の声が聞こえた

「やられたようだな……二人とも大丈夫……とは言えないみたいだな……つて」

M16が気づく

「ベル……アルケミストを殺ったのか……？」

ベルは指をさして頷く

「お前は相変わらず凄いな……ベル」

その後は入院生活となった二人

第十九話 過去の自分

「……
|
???

「………?」

ベルが目を覚ましたのは医務室……ではなく、どこかで見たことある場所だった
間違いなく、西ベルリンにあるアドラー達のセーフハウスであった

「………」

ベルは起き上がり、ドアを開けると

「………?」

ボードの前に立つ誰かが居た
すると

「アア……オキタノカ……ナンダア?ヘンテコナカオシテ」

間違いない。トラブゾンでアラージュに殺された時の自分だった

ただ、性別は女になってたけど

「ワタシハ、オマエノナカニイルモウヒトリノジブン。マア……オマエガトラブゾンデ

シンダトキニアラワレタノハウガタダシイカナ？」

「……………」

ベルは首を傾げる

「チツ……この喋りかたダリイ……もう少しまともなしやべりかたねえのか？」
とは言ったものもう一人の自分は直ぐに普通の喋り方に戻った

「良し……これではつちり……そうだベル。なにか聞きたいことはあるか？」

選択肢は

▶ あんたの名前は？

▶ ここは一体どこなんだ？

ベルは下を選択した

「そうだなあ……ここはお前が作った空間……お前がまだ幼少期だった頃だ」

幼少期……考えたことも無かったと思うベル

「話は長くなるんだがな。だが、この話はいつでも出来る」

そして、もう一つの選択肢を選ぶと

「私のか？お前なら何回も聞いたことあるだろう……ヒットマンだよ」

▶ 何故その名前なんだ？

▶ その名前がどうして私と関係ある？

「そうだな……お前は知ってるか？教会をぶつ潰す作戦に参加したのは？あの時、信者を刺しまくっていただろう？それはな、私の意識とお前の意識が一時的に移り変わったんだ。それが影響で信者を刺しまくった……これで良いか？」

「まあ……ここは良いもんだよ。だが、これだけは気をつけてくれ。お前が生きていないと私も死ぬ。だが、お前が追い込まれた際は……私を頼れ。それとお前の最高の仲間にもだ」

「……………」

「さて、話も済んだことだし。どうだ？ウオツカを飲まないか……いやタイミングが悪いな」

「……………」

その言葉と同時にベルの意識は薄れていく

「大丈夫さ。死にはしない。目を開けそうなんだよ……フツ、お前と話せて楽しかったよ。じゃあな。友よ」

ベルの意識はここで途切れた

「……………」

目を開けると、今度こそ医務室の天井であった

隣には

「……………」

S O P I I が何故か隣に居た。恐らく、ずっと見てくれたのだろう

「……………」 ナデナデ

するとS O P I I は幸せそうな顔になっていた

ベルは静かな声で

『スパシーバ…………』

と言った

その後は、M 4 達に少しお叱りになることになったベル

ベリコフはウオツカの力で骨折も治ってきてるとか（本来ではそんな事はないです）

因みにベルの腕は16 Lab に見てもらった事になった。

意外に損傷が酷かったためである

一日はベット生活をする事になった

第二十話 鉄血襲撃

16Labに向かっているトラック

「……………」

護衛のトラックも前後を走っていた

ベルは義手をつけていた。応急処置として

「ベルさん、お手の方は……」

護衛兵が聞く

ベルは問題ないと伝えた

「そうですね、良かったです」

護衛兵はk r i g 6を持っていた

「このライフルが気になりますか？これはベリコフ少佐から貰った銃です。後ウオツカ
も」

やっぱりウオツカ好きだなベリコフは……

と言っていると

『何だ？マズい！ブ레이크』ドカーン!!

先頭のトラックが爆破した

「マズい……襲撃です。ベルさん、ここは任せてください」

護衛兵が降りて反撃しているが、所詮数人だけだ。相手は何人も居るだろう

ベルはM16A1とトカレフを持ち、鉄血に応戦した

が結果は残酷だ

「シャイセ……味方部隊は全滅した……今は隠れてるとは言え……長くは持たなそう
だ」

護衛兵と一緒に隠れているベル

「でも何故だ……何故移送しているのがバレた……？もしかしたら、内通者が居た可能性も……」

護衛兵は必死に探る

ザッ

『マズい……まだ近くにいる……リッパーの大群だ……』

この軍団に見つかればこっちが瞬殺されるだろう
すると

「どこにいるのかしら……」

一人だけ様子が違った。しかし護衛兵は分かっていた

『あいつは……ドリーマーだ……鉄血の幹部……』

ラスボスの襲撃にあつたようだ

「なんですって!?!襲撃!?!」

16Labからの無線で、目標のトラックはいつまでたっても到着しないと言う連絡が入った

「はい………ダミーのトラックも全滅し、搭乗者も全滅です。計画的です」

「一体誰が……」

『ふうー……ふうー……』

あの後十分ぐらいあの空気を耐えたベルと警備兵

「……………」

「今なら……………行けそうだ……………ベルさん。なにかナイフとかないですか？」

ベルはナイフを差し出す

「よし……………喰らえ！」

警備兵がナイフを投げた先はリッパーがおり、ナイフが頭に命中。リッパーは死んだ意外とサバイバル経験は高いのか……………

「警備兵になる前は、よく父とサバイバルに行ってた。ただ、鉄血の攻撃に巻き込まれて死んだが……………あの時は本当に悲しかった」

「……………」

「……………いや、こんな水臭い話は後だ。今は脱出経路を見つけないと」

と警備兵が確認したその時

「グハア!？」

警備兵が倒れた。そして居たのは

「あら、ここにも居たの？でも貴方に興味ないから、死んで？」

ドシュツ!!

「……………!!」

警備兵はやられた。

「さて……ここいつが近くに居るってことは……目的のヤツも居るね。どこかなあ？」
と去っていった……

と思っていた時期が私にもありまし「ガン!!」ウツ……
ベルはドリーマーに殴られた

第二十一話 尋問と脱出

——鉄血の前線基地——

「……………」

ベルは目を覚ました……………が
ジャラジャラ……………

「……………」

鎖で手足を拘束されていた

少し引つ張つてみるが、びくともしない。きつく拘束されてるみたいだ
すると、歩いてくる音が聞こえた

「は〜い、気分はどう?」

最悪だ。と先に思ったのはその言葉だった
相手はドリーマーだった

その頃グリフィンでは

「うわ……これはひどいですね……」

「応戦はしたようね。ただ、相手の方が上手だった……と」

A R 小隊は襲撃現場に到着した時には、地獄絵図だった

「このトラックだけは無事みたいだ。恐らくベルも乗ってた筈だ」

「ベル……一体どこに……」

「グハッ……」

現在拷問をされているベル

ドリーマーが顔をぶん殴ってくるだけだが、それでも痛い……

「このツ！このツ！なんとか！言いなさいよ！」

どうやら何も言わないベルに腹が立ってるようだ

「はあ……はあ……何も言わないのね……フフ、でもそこが面白いわあ……こいつを牢に閉じ込めておいて。決して逃さないで」

リッパー二人に連行された

「……………」

地下牢か……ドアも錆びてるとは言え、硬いことに変わらん

何もない……あるのは硬いクソベツトとトイレだけか……

『ベルさん……う？ベルさんですか……う？』

小声だが、自分を呼ぶ声が聞こえた

「……………」

暗くてよくは見えなかったが、誰かは分かった

「……………！」

「ベルさん……私です。G3です……」

「すみません……こんなボロボロな格好で……」

G3の今の服装はそのままだが、破れている所もあり、下が見えていた

「……………」ギョッ

「／／／ベルさん……恥ずかしいです……」

ベルはG3を抱いた。少しでも安心させるために

それと同時に脱出作戦も考えていた

「脱出……ですか？でも方法なんて、あるのでしょうか……？」

「……………」コクコク

それがあるんですよみたいな顔をしたベルは、少し目をつむった

その時

ドカーーン!!

爆発音が響いた

「どうなってるの!?!何故暴走してる!」

外はリッパー達同士で打ち合っていた

それと施設の防御態勢も確実にダウンしていた

「誰だ!誰だ!こんな事をするのは!?!」

ドリーマーは憤慨していた

「……………」

「ベルさん……貴女は一体……」

とベルは立ち上がり

「ふうく……」

集中しそして

ドカーン！

ドアを蹴破った

「……」

「凄い……」

ベルはG3をお姫様抱っこして出た

「……」 チラッ

「／／／／／／／／／／／／／／／／」 ギュウ

G3も顔を赤くしながらベルにしがみついていた

そして敵を回避して向かった先は

「……」

武器庫である

第二十二話 救援、脱出

「——ベルはそこに捕まっているのか？」

「そうなります。厄介なのがハイエンドモデルのドリーマーって言うボスです」

「……夢思想家か」

「ふえ!? ベリコフさんいつの間に!？」

「さつき入ってきたばかりなのだが……」

「M4、後で謝っておけ」

「うう……」

「救助の作戦はあるのか!」

「はい! そのままでベリコフさんの助けが必要です!」

「へりは!? へりが無いと話にならないぞ!」

「あれじゃない？」

AR—15が指差した先は

「え……ハインドだ」

ハインドがあつた

「でもどうやって？」

「指揮官、買つたらしいのよ。勿論自腹でだけど」

「え？AR—15、何で知ってるんだ？」

「SOP IIも一緒に聞いてたし」

「え!?そりやまあ……たまたま……」

「……とにかく急ぎましょう。ベルさんの命が危ない！」

『操縦感覚は変わってない！武器弾薬も当然載せてある！好きなように使え！』

「C4もある……ライフルのマガジンも」

「どこからこんなに取り寄せたのかしら」

『一機目のハインドを見つけた時、倉庫があつたんだ！ソ連軍が基地として使ってたの
だろうーだが、M16等のライフルも沢山あつた！武器の宝庫かと思つたよ……』

か、あれじゃないか！黒煙が上がってるぞ！』

「ホントだ！鉄血同士がやり合ってる！」

「……何故だ？リツパー達が何故……？」

『手始めに掃討開始だ！』

カチツ

ダラララララララララ!!

『フハハハ！ハインドに敵うものは無い！良し！着陸する！なんでも良い！合図を送ってくれたら直ぐに反撃する！』

「ありがとうございます！気をつけてください！」

『おう！』

「ベリコフさんのおかげで基地に楽に入れましたね」

「だが、敵は多いみたいだ！」ダダダッ！

「SOP II！手榴弾を貸して！」

「わわ！AR—15！」

AR—15は手榴弾を投げ、敵を吹き飛ばした

「わーお」

「何？」

「いや、なんでもない」

「そう……」

「ここまででは来ました。ですが……」

「……もぬけの殻、だな」

「一つだけ乱雑に開いてるよ。ベルもしかしてぶち破ったんじゃないの？」

「そうだとしてもこの後は？また捕まってるかもしれないわ」

『来たわね。グリフィンの雑魚人形が』

「！ドリーマーか！」

『せいかいい♪あつ、もしかしてベルをお探し？』

「……そうよ」

『ハハッ……ベル……あいつは何も吐かなかった！まるで！本当の人形かのように！そして逃げた！どうやって逃げた!?!』

「逃げた……?」

『リッパー達が！いきなり暴走した！止めようとしても！指揮権は剥奪されてた！絶対ベルだ！ベルが何か仕掛けたに違いない！どこだ！どこに行った!!』

とカメラ映像が途切れた

「まさか、こんな事をしたのも……」

「ベルが……」

「でも何故？ベルにそんな能力が……」

「……ペルシカはベルに一体何を」

「ベ……ベルさん」

「……」

武器庫を見つけたベルとG3。

そこには押収品があった

「……」

「まだ、撃てます」

M16と1911を装備したベル

「ベルさん！反撃です！」
「……………」
「ニヤッ」

第二十三話　ボス戦　夢想家（ドリーマー）

「はいです。ハンコが屋上です」

「……………」

ベルとG3は屋上に到着したが、今自分が見えるのは見たことがある赤い扉だった

「……………」

懐かしく思いつつ、ベルは赤い扉を開けると、視界が少し歪んだ

「?ベルさん?」

「……………」

なんでも無いと返した

「そうですか。気をつけてくださいね」

見えたのはハインドが屋上の鉄血兵を吹き飛ばしていた

「……………」

発煙弾を投げ、位置を知らせる

『ベルを発見！屋上だ！』

「屋上!?!」

「行きましょう。ドリーマーに会わなければ良いけど」

「……………!」

「なんでこんな所に……………」

屋上に鉄血兵が湧いてきた

階段で待ち伏せ攻撃をしては居たが、長くは耐えれず、追い詰められていた

ダララララララ!!

ベリコフのハインドがバルカン砲で掃討していた

穴だらけになってたけど

『ベリコフだ！AR小隊も屋上に向かってる！迎撃を頼む！』

ベルは戦術人形なのだが、実は装甲持ち。ペルシカは明かしてなかったけどね

ある程度の攻撃には耐えられた

すると

「ベリコフさん！危ない！」

ドカーーン！

『アブね!? 攻撃を受けた！だが、異常なし!』

攻撃した人物は

「フフツ……ベル〜? 逃さないわよ〜?」

いかれた目をしたドリーマーが居た

「さあ……! 私と楽しみましょう?」

レーザーで攻撃してきた

「きやつ……ベルさん……」

「……………」

「え? ベルさん……何をして」

ベルはG3を投げた。ハインドの扉が開いていた

「……………」

行け！とベリコフに伝えた

『……了解。後で必ず来る。AR小隊にもそう伝える』

といい、ハインドは離陸した

「ふうくん、貴女一人でどうにか出来るかしらね？ゴミ人形が」

「……………」 イラッ

ベルはM16A2を構えた

「さあ……楽しみましょ？」

——身を守るものが無い！

「あつはは！どうしたの!?ほらほらさっさと攻撃してみろ！」

ジリ貧だな……あつそうだ、火炎瓶あつたやん

ベルはモロトフをドリーマーに投げた

「あ、熱い！いいいい!!」

効果は抜群のようだ！

「ぐううううう！殺してやる！殺して（傘）を埋め込んでやる！」

やってみろ——死ぬのはためえだ！

ダダダダダダ!!

「!?」

ベルはM16を発砲し、ドリーマーの片手と両足を吹き飛ばした

「ぐうううう……ふん……ゴミにしてはやるわね……ああベル……貴女を私の手で飼
殺したいわあ……♪」

その頭のネジはどこで外れたのやら……

ベルはM16をドリーマーの頭に近づけ——

ダダン!!

三点バーストに切り替えた音が聞こえた

「ベルさん!」

ぐふう……

「……心配しました。どうしてくれるんですか?」

分かったM4……そんな光が無い目で言わないでくれ……

「まあ……ドリーマーも死んだし。かいけーっ!」

「そう言えばベリコフさんは?」

あいつは――

「そういう事ね。納得したわ」

「ところでベル。そのアサルトライフル。私と同じか？」

M16が聞く。ベルは少し違うと返した

「……………」

「M16……A2？ M16は同じだな」

「指揮官に頼んで私の妹も作って貰おうかな……」

「姉さん？」

第二十四話 M16A2

「……………」

「お姉さん！」

何故こんな事になったのか

——二時間前

指揮官室

「え？新しい人形が来る？」

「……………」コクッ

ブタノワ指揮官に報告書を渡した

新しい人形についての

「ふむ……………M16A2……………ね。写真も入って……………あ？」

ブタノワ指揮官は目を見開いた

「……私の見間違いだと良いのだけど」

「……………?」

「見る?」

ベルはM16A2の写真を見ると

「……………!」

まさに自分とそっくりの戦術人形であった

「初めまして。私はM16A2です。宜しくお願いします」

「初めまして」

「……………」ペコッ

今日M16A2が基地に来た

「……………お姉さん?」

「……………?」

いきなり『お姉さん』と言われたベル

M16A1の写真を取り出すと

「A1姉さん……………会いたいです……………でも、貴女も姉さんです」

「??????」
言ってることが良く分かってなかったベル。ただ顔が似てるって事位しか――

「宜しくお願いますね？お姉さん」

「……………」

「どうですか。お姉さん」

射撃訓練を見ても、命中率は高かった

なんだろう……自分の腕と似ているような気が……

――さてはペルシカの仕業だな

とベルは思った

「あれ？ベル。隣の人形は誰だ？」

M16A1が来た

すると

「A1姉さん……」

「うん？」

「お姉さん！」ギユッ

「うおっ……べ、ベル。この子は？」

「成る程な。つまり私の派生タイプのライフルと……」

「……………」ギュー

「……………」ニコッ

「ハア……二人とも似た者同士だな……にしても私の妹が増えたな……ベル？一応言っておくが、私の妹達には手を出すなよ？」

「……………」コクコク

「姉さん……？」

後ろからM4A1の声でした

「あっ……M4……」

「ちよつと……来てくれる？」

「ウウッ……」

「ベル。その子は？」

AR—15とSOP—11が来た

「わあー、新しいお友達だー！名前は何？」

「M16A2です」

「M16A2……？A1とはどういう関係？」

「姉妹です。後ベルお姉さんも」

「……………」

「SOP—11、A2と遊んで。ベル。こっち来て」

「ふーん、そう言うことね……………」

「……………」

「あのヘリの時に言った事が現実になった……………ね。あの人は妹が増えて喜びそうね」

「……………」
「コクコク」

「で？どうするの？貴女の事も姉だと思ってるみたいだし……………」

「……………」

「アハハッ！」

「SOPお姉さん！待ってくださいーい！逃がしませんよー！」

「楽しそうね……SOPIIは」

「……………」

「あつ、居ましたね」

「ウウツ……」

M16がぼろぼろになっていたが、誰も気にしていなかったそうなの

第二十五話 不穏な事態と襲撃者

鉄血工造本部

「ハハハツ……!」

新しくなったドリーマー。ただ、頭がいかれていた

「ベル!ベル!あいつ!やつてくれたな!」

「……目を覚ましましたか。ドリーマー」

「お?エージェント。なんでこんな所に。グリフィンの奴らに捕まつてたはずじゃあ?」

「脱走しましたが……それとここに来た理由は貴女が修復されていると聞いて」

「そうだ!あいつだ!エージェント!ベルは知ってるか!」

「ベル……ああ。知ってますよ。……まさか倒されたと?」

「その通りだ!倒された!手を抜いていたとは言え私が!ただの!人形なんかに!」

「……ベルは戦術人形なのですか?」

「知らなかったか?あの動きが出来るのもゴミの奴らとは遥かに違う……!私も油断し

てたわ！アハハ！」

「……………気を付けてください」

「分かってるわよ……………♪フフツ、ベル……………今度こそは全体に手に入れてみせるから……………♪死なずに待っててね♪」

「……………うう」

ベルは魘されていた

「ふふ……………さあさあ、逃げて逃げて……………♪」

ベルは1911で応戦していたが、全く効いていなかった

「……………！」ダン！ダン！

「無駄無駄……………♪」

いつの間にか壁際まで追い詰められ

「ベルの全部……………頂戴……………！」

ドリーマーだった

「うわあ……………」

ダン！ダン！ダン！

護身用の拳銃で目の前を発砲したが……

「……………」

ガラスを発砲していた

「ベルさん!？」

M4が突っ込んできた

「……………」

「大丈夫ですか!?!何がありましたか!?!」

「……………」

その後は他の人形達もやってきた

夜中に魘される……とベルは言った

誰にと言われたら……ドリーマー一択である

しかし何で今頃になって……

しかもそれに合わせてエージエントも脱走したとのこと

不運続きだ……

「……………」

ベルは割れたガラスを見て考えていた

——もう末期だな

と考えていた

窓ガラスまでドリーマーに見えてしまう……こう……割れた欠片がドリーマーの部

品一つ一つになってしまう……

こうなったら……さっさと処理だ

この日一日は珍しく休暇を取ったベル

「……………」
——やはり休むのも良いものだ……

と思っていたら

「…………チツ」

舌打ちしたベル。なんとなくではあるが、誰かにつけられていたベルは建物の窓ガラスに目を移して見たら

「……………」
……やっぱりつけられてるか

顔つきはロシア系……それと筋肉質な体格……

何故私を？……暗殺か……？

ふっ……良いじゃねえか。受けて立とう

「……………」
ここは廃墟。だれも使っていないがな

「……………」
ベルは柱に向けてサブレッサ―1911を撃った

ドシユン！

「……………」

「気づかれましたか……効率が悪いですね」

出てきたのは自分を尾行してた奴だった

「……………」

「私は命令を受けて尾行しました。もう一つの命令は……」

「貴女を殺せ。です」

と殴りかかってきた

「！」

ベルは上手く躲す

「……………」やはり素早さは厄介ですね。私はAK-15。そして、ここで殺す」

また殴りかかってくる

「……………」

ベルはAK-15に向けてダッシュで走り、殴る寸前で目の前でジャンプした

「!?」

「……………」

ベルもまさかジャンプできるとは思わなかった

これも16Labとペルシカのお陰なのか……

「やはり効率が悪いです……本気をだす」

とそこから格闘戦に入った

「……………」

「グッ！避けられる！」

ベルはなんとか躲していた

AK—15の一発が腹に入った

「グフッ……………」

「…………ダメージは入っても致命的な損傷は無し…………」

AK—15は構えると

「だが、これで終わり！」

ガシッ！

…………ベルは片手で受け止めると

「……………」

「グッ！は、離せ！」

AK—15の左手を捻じ曲げようとしていた

しかしベルは離さず、そのままAK—15を一回転させた

「チツ……警戒する必要がありますね」

「……………」

A K—15はナイフを持っていた

そしてそのまま突撃して刺す……筈が

「……………え？」

「……………」

止められていた。片手だけで

そしてA K—15からナイフを奪うと

ザシユツ！

「!？」

A K—15を刺した。

「グ……………あ……………」

「……………」

そしてA K—15に耳元で囁くように

『殺されるのはお前だ』

と囁き

ザシユツ！ザシユツ！ザシユツ！

「ぐわッ……この……！」

叫ばれないようAK—15の口元を抑え、何回も刺した
流石傭兵。容赦ない

止めにもう一発刺そうとした時

「そこで止めたまえ。ベル」

「……………」

見慣れた顔だった

「……………」

「流石に社長の顔を見れば流石に止めるか？」

クルーガーだった

やっぱり顔つきはウツズなんだよなとベルは思っていた

「立てるか？」

「がはっ……ぐう……」

「……重症だな。おい、担架を」

と言い、AK—15は担架で運ばれていった

「……………」

「大丈夫さベル。あれはな、私が命令したことだ」

「……………？」

「殺せと言う命令だが……実は格闘のデータが欲しかったただけだ。大変、すまなかつた」
「……………ハア」

と言い、座り込んだ

「まあ………このお詫びに夜に来て欲しい所がある。0900でこの店に」
と渡されたのは

「……………」

居酒屋店であつた

第二十六話 飲み会

「……………」

「おかえりなさい。ベルさ……どうしたんですかその傷は!？」

帰ってきたのは良いが……M4が居た

「……………」

「もしかして……誰に襲われたんですか？言ってください。ベルさんに傷をつけた人はこの私の手で……………」

「……………」ブンブン

——この子こんなキャラだっけ？

襲われたが、撃退したとだけ伝える

「そうですか……良かったです。でも、言ってくださいね？今度やった人には……フフ
フ……………」

「……………」ゾッ

本当にこんなキャラなのか?と思っているベルであった

その後はM16A1、A2姉妹やAR―15、SOP IIも来た
勿論心配された。AR―15は

「ベルなら、問題ないでしょう」

と言っていたが

0900、約束の時間にて

「来たか。ベル。席は取ってある」

「……………」

グリフィン傘下の飲食店に来たベル

クルーガー社長だけかと思っただが、ヘリアンも居た

どうも重要な話とかなんとか

「この店には何回も来てた。全く相変わらずだ。それで、重要な話とは?」

「はい。実は16Labからの情報ですが……………ベル、貴女はどんな記憶を?」

「……………」

「経験した記憶などをそのままに、戦術人形へと変える実験は成功した……その時の経験だ。ベル」

「……………」

ベルは話した。ロシア語ではあつたが

「——つまり、この世界の人間では無かつたど？」

「……………」 コクコク

「成程……確かに今までの戦術人形で『ベル』などの単語をつけた戦術人形など居ない。それと元の世界では……傭兵をやっていたのか？」

「……………」 コクコク

「しかし、ベルは何故裏切られた？」

「……………」

……ライバルと言う理由では済まされないだろう

「……………大変だったんだな」

社長……………

「傭兵をやるのは、きつい仕事だ。ベルもその中の一人だったんだな」

「気づけば、もう十一時になっていた」

「……………」

「帰るのか？分かった。奢っておくよ」

「……………」 ペコッ

ベルは店を出ていった

そして帰ると

「……………」

「……………」 ジュ

……………AK-15がずっと見てるんだが

というか、なんか喋ってくれ。ロシア語でもいいから

「……………ベル、だったな？」

「……………」

「フフっ……………私の良いライバルになってくれそうだ……………」

と言い、どっかに行つた

自分の部屋に戻ると

「……………」

「よお、ベルう?」

酔つ払つたM16A1が居た

「ベルう……………えむふおーが構つてくれないんだよお……………うう……………」

……………酔つ払つてますよね?

……………あ

「M16姉さん……………」

「……………」ヒッ

……………M16はM4にどこかに引きずられていった

そして戻ってきた時にはM16は大人しくなっていたそうなの

第二十七話 拠点襲撃

目標地点にてベリコフのハインドで向かつてる最中

「……………」

「スウ…………スウ…………」

任務中なのにベルの膝で寝ているM16A2

「全く任務中なのに…………」

AR—15は呆れていた

「……………」 ペシペシ

「うん…………？おはよ…………」

起きたA2

「ベル、今日はA2の初めての任務だ。お前の援護も頼むぞ？」

「……………」 コクコク

ベルは了承した

「ここだな」

「一見なにも無いけど……」

「……………」

ベルはベリコフに無線を入れようとした時

『ザザツ……キイイイ！』

「!？」

無線から聞こえるのはノイズ混じりのキイ音が聞こえた

「……………」 クラクラ

何故かベルの頭はぼーつとしていた

「ベルー！」

AR—15の声で正気を取り戻し、ベルは直ぐに無線を切った

「ハア……ハア……」

「ベル……大丈夫？」

SOP IIが心配そうにする

すると

『あーあ……後三秒あれば行けたのだが……』

「誰だ!？」

『フフっ……私はアルケミストだ。久しぶりだな、ベル?』

「アルケミスト……!何故だ!?!ベルが倒したんじゃ!?!」

『まあ……倒された後はまた新しいのが出来てたんだよ。だから復活できた。ドリー

マーもまた同じだ』

「……ゲッ」

「ゲッって聞こえた……」

「ベルもそんな声するのね……」

『さーて……ここからお楽しみ時間だ!ネゲヴ小隊も同じのを受け取ってると思うぞ?』

「……チッ」

(……苛ついてるな)

M16A1はベルの苛立ちの態度に気づいていた
それからアルケミストの無線は切れた

「で、どうするの？ネゲヴ小隊は襲われてる可能性が高い」

「……………ここで分断しましょう」

「ほう？何かいい案があるのか？」

「ちやうど三人三人で分かれます。SOP II、A2は私と、ベルさん、AR-15、M16姉さんに分けましょう」

「敵の拠点は掴めてる。……M4、頼むな」

「分かっています」

「あれか……………」

「……………」

「敵の数は約20……フツ、私達ならやれるな」

「……ハアー、ベルも反対しないんでしょ？」

「……………」コクコク

「ベルも似てきたわね……私達に」

と言いつつもAR―15もやる気満々ではあつたが

「いくぞ！ベルに続け！」ダダダダ！

リッパーとイエーガーの銃撃を受けながらも突撃する

尚、そのうちの一発が

「グッ……………」

ベルに命中した

「ベル!?大丈夫!?!」

AR―15が気づいた

「……………」コクコク

何事も無さそうだったベル

そのまま敵拠点まで突入し、破壊した

ここまでは良かったが

「グ……………」

「ベル！」

さっきの弾はただの弾では無く

「……あ」

”例のウイルス”が入っていた弾だった

第二十八話 鉄血化

「ハア……ハア……」

「ベル……? 聞こえる?」

ベルは撃たれて、今はAR―15と一緒に居た

M16A1は救助要請中

「うう……クツソ……」

ベルは手信号で伝えた

今、ウイルスに感染。今直ぐ離れる……と

「ウイルス……! まさか”傘”……!」

「……………」コクコク

傘ウイルスに感染したベル。

原因はイエーガーの狙撃弾に傘ウイルスが混ざってあった事が原因とベルは考えた

「そんな……ベル、嫌だよ……」

AR―15は悲しそうに言うが、現状は最悪だ

ベルはまた手信号で

離れる……いずれ何をしようが間に合わない……貴女たちを殺すかもしれない……

「うう……ベル……」

「AR—15！何があつた!？」

「ベルが……”傘”に……!」

「何だと……shit！」

M16A1はベルに近づく

「ベル、しっかりしろ！自我を見失うな！」

「……………」ガタガタ

「まずい……傘の侵食が速い……AR—15……ここはもう……」

と同時にベルは立ち上がると

『逃げて……貴女達が死ぬ前に』

『逃げて!!』

ダダダダダダ!!

ベルはいきなり発砲した

「!? やっぱりこうなったか!」

「ベル……ベル……!」

『ここだ! つて、ベルは!?』

「ベリコフ! 今はそれどころでは無い! 早く離陸しろ!」

『何故だ! ベルは……oh my god……』

ベルの姿は変わっていた。髪も黒髪から白色に変わっており、完全に別人だった

「ベル……」

『……これより離脱する』

ベリコフのハインドは離陸した

「そんな……ベルさん……」

M4は膝から倒れた。シヨックであろう

「ベルお姉さん……何で……鉄血化に……」

「ペルシカ!?緊急事態発生よ!」

『どうしたの?そんなに慌てて』

「ベルが……敵に回った……鉄血化してしまった!」

『……………ベルが……………』

ベル視点

これで良いのか?自分でもわからないことがある

にしても……………こんなだっさく鉄血化してしまうとは……………

グリフィンには顔向けは無理だな……………

「よう、久しぶりだなベル?」

「……………」

久しぶり……………と言いたいがな。アルケミスト

「ハハッ、これもな、全ては私達の為さ。ご主人様の希望を叶える者は……………M4A1とお前だ」

「全員集まったね……」

戦術人形全員が集まった

「今日、任務中の戦術人形ベルが」

「鉄血化し、敵に回りました」

戦術人形（二部を除く）はザワザワしていた

「現在確認中にはあるが、同任務に参加したAR-15、M16A1からの話では、ベルは狙撃され、それが傘だったと……報告しています」

「16Lab製の人形が敵に回る、しかも新鋭の人形です。くれぐれも、警戒するように」

第二十九話 戦闘実験

ベルが鉄血化になってから二日後……

「ふむ……グリフィンがベルを重宝する訳です。戦闘能力が桁違い」
エージエントはエクスキューシヨナーとベルの戦闘実験を見ていた
今現在はベルが優勢であった

「チツ！ベル強すぎだ！間違っても殺すんじやねえぞ!？」

「……………」

「その真顔やめろ！」

エクスキューシヨナーからの斬撃もさりと躲すベル
尚、この時のベルは完全に真顔だった

ベルも攻めの攻勢に出る

「……………」スチャ

ベルは1911を取り出し

パンパン!!

「!？」

エキスキューションナーのブレードみたいなのを吹き飛ばすと

「……………」

ベルは体当りし、ナイフを抜き、エキスキューションナーの首に当てた

「……………」ハア、今日も俺の負けか……………」

尚、酒の席になると変わるらしい

「ベルう……………」もうずがれだ〜書類整理もヤダ〜」

「……………」

ベルは黙ってウオツカを飲んだ

そう言えばベリコフから貰ったんだっけ——

「どうした？ベル？」

「……………」フリフリ

何でも無い——と返したベルだが、心の奥底には、悲しみもあつた
今日に限つては表情が顔に出ていた

「……………」

「うわー！ベル！驚かささないでよー！」

「……………」

えーと確か……………デストロイヤーだっけ？

「名前はちゃんと覚えてる？」

「……………」コクコク

「そうだ！ちよつとね、ドリーマーから逃げてるんだけ「見つけたわよ？お馬鹿さん？」

……………ヒエツ」

「あら？ベル？久しぶりねえ？私を倒してから数日振りかしら？」

「え？ベル、ドリーマー倒したの？」

「……………」

「こいつがグリフィンだった時の事よ……あの時は本気で殺してやると思ってた……けど、今ここにいる。私達の仲間として」

「……………」

「これからも宜しくねえ？ベル？」

ベルは悍ましく思った

ドリーマーだけは味方でも一番アカン相手だとベルは思っていた

「それで、今は私と居ますが」

「……………」

作戦進行中のエージェントとベル

「にしても、ベル。貴女が仲間になってくれるのはとても大きいです」

「……………」

好きで仲間になったわけじゃねえんだけどなあ——とベルは心の中で言った

未だに傘に感染しても自我は持っていた

今じゃハイエンドモデルクラスの戦闘能力を持ち合わせていた

「さて……グリフィンの人形共を叩き潰しましょう」

「……………」

ベルは……K r i g 6を構えていた

「ふん、グリフィンのクズ共はこの程度ですか？」ダダダダダダ！

「……………」

いつ見ても斬新な攻撃だな——

だれがスカートを捲って攻撃すると思う？

すると、ベルの目に知っているのが写った

A R 小隊——！

「来ましたか……ベル、援護を頼みます」

第三十話 交戦……

「AR小隊……ですわね。ベル、援護を」

「……………」

krigi6を構え、交戦に備える

相手も気づいたようだ

ダダダダダダ!!

「この程度!」

エーリエントが反撃し、ベルは援護した

「……………」

ベルの標準には、M4A1を捉えていた

だが、人数が多い。ダミーだろう

「……………」 ダダダ!!

M4のダミーが倒される

だが本体は——？

「このお！」

後ろからM4が銃を持って殴ろうとした

「……………」

ベルは防ぐ

「な!？」

「……………」

ベルはM4の銃を奪い捨て、ナイフを持って近づいた

「ま……………待って……………来ないで……………ベルさん……………！思い出して！あの時の記憶を！」

「……………」

ベルは思い返した——

だが、何故か思い出してもノイズが混じりに混じっていた

「ベル！覚悟しろ！」

M16A1が追突してきた

「グハッ……………！」

「M4！逃げろ！」

「M16姉さん……………！」

「この始末は……！私がつける！」

エージェントもダミーだったようだ

「さあ……これで一対一だ……来い！」

「……………」

格闘戦なら自信があつた

「この……………」

「……………」グツ……

M16A1の腹パンが命中した

「チツ……………」

「どうした？もつと来い！」

ベルはM16A1の顔を殴る。

「ガハッ……………！良いのが来たな……………」

「……………」

畳み掛けるようにベルはM16を追い詰める

「が……………！グフツ……………！」

M16はだんだんと追い詰められた
いつの間にか木まで追い詰められた

「グッ……」

「フー……フー……」

ベルは、ナイフを構え、どんどん近づいた

「ハハッ……まさか、ベルとやり合うとは思ってなかったよ……」

「……」

「でもな、ベル。忘れるなよ？」

M16はニヤツと笑い

「私だけじゃ、無いつてことを？」

パシユン!!

「……」

狙撃……まさか、AR——15——？

「ここで、決める！」

クソ！SOP IIまで……！

「逃しませんよ！」

M4A1……！チツ……！

「さあ……形勢逆転だ。どうするベル？」

「……………」

ベルはニヤツと笑い

「……………！」

モロトフを周りに投げた

「な！」

包囲網にスキが出来た所にベルは走った

「くっそー！逃さないで！」

M4の声が出た後に銃撃

「……………」

ベルはスモークグレネードを投げ、追跡を遅らせる

ベルは逃げ切った

「大丈夫ですか？ベル」

エージェント（本体）の声が出た

「……………」 コクコク

「傷が酷いですね。帰還しましょう。それと、報告書も、まとめてください」
「……………」コクコク

「ベル……………」

「逃げられましたね……………」

「くっそ〜！後少しだったのに！」

「ベル……………火炎瓶も数本投げて来たわね……………」

A R小隊も、M 1 6以外は無事であった

M 1 6は損傷があった

「M 1 6姉さん……………」

「やめてくれM 4……………大した傷じゃない……………大丈夫だ」

その後はベリコフのハインドが到着。帰還した

第三十一話 基地襲撃

「——ベル、身体の方は大丈夫ですか？」

目を開けると、エージェントが隣にいた

「……………」

「スリープモードに入って2日ですが……やはり回復は早いですね」

受けた傷も治っていた

「身体の状態が整ったら、司令室に来てください」

と言い、部屋から出た

「おっ、ベルじゃん！」

「……………」

デストロイヤーが居た

「もう傷治ったの？」

「……………」コクコク

「良かった……………で、司令室に行くの？」

「……………」コクコク

「分かった。気をつけて〜」

「キましたね」

「……………」

「さて、作戦を考えましょう」

ベルはエージェントと作戦を考えた

目標は……………S—12地区。自分の元所属基地だ

「そこで、ベル。貴女には現場隊長をしてもらいます。勿論、ちゃんと戦力があります」

リッパードとヴェスピドの混成部隊か……………あとイエーガーも

「……………」コクコク

「分かりました。基地を攻撃して、機能不能にさせてください。作戦開始時刻は三時間後です」

「……………」コクコク

「ベルか」

「……………」

ハンターが居た

「数時間後に出撃か？ 頑張れよ。お前は知ってると思うが……………まあお前が一番分かっているし、言わなくても大丈夫か」

「……………」

「それとな、私とエクスキューショナーも出るぞ」

「……………」

「聞いてなかったのか？……………エージェント、伝えるのを忘れたか？」

「……………」

「まあ、お互い頑張ろう」

三時間後……

S—12地区を進撃中

「……………」

「お前は相変わらず真顔だよなあ？前戦った時もそうだっただろ？」

「……………」

「エクスキューションー、ベルが反応を示してないぞ」

「げえ……なんと言ったら良いんだ……？とにかく少しでも良いから笑えよ」

「……………」

ベルは笑った……が

「ひ……………」

エクスキューションーは少し怯えてしまった

「……余計なことを言わないほうが身のためかもしれないな」

ハンターはそういった

「あれがグリフィン共の基地か……」

「そこら辺の基地と変わらん気がするが」

「……………！」

ベルは気づいた。ドローンが飛んでるのを

「うえー！」

「どうしたベル!？」

「……………」

指で上を見ろ、とジエスチャーすると

『なる程な…………ドローンに気づいた訳か』

『でどうするんだ?』

「……………」

やり過ぎす——

なんとかドローンの監視を掻い潜ったベル達

「ふう…………オレはめっちゃヒヤヒヤしたぜ…………」

「私もだ…………」

「……………」

ベルは見つけた……基地を

「あれが基地か……ハンター、ベル、やってやろうぜ？」

「そうだな。狩りの始まりだ！」

「……………」

ベルはリツパー、ヴェスピドに合図を下し

「……………」

ダダダダダ!!

攻撃を開始した

第三十二話 機能低下

「何が起こってるの!？」

ブタノワ指揮官は突然目を覚ました

爆発音で起きたのだろう

「ご主人様! 鉄血の襲撃です! その中には……」

「何ですって!?! ……ってまさか」

「ベル……も確認できました」

「ハハハッ! 良い暴れっぷりだなベル!」

「……………」

ハンターとエクスキューショナー、ベルは基地襲撃に成功した

「この目標は基地の機能を低下させる事だよな? ってことは、重要施設を破壊しまくれ

！」

すると

「鉄血か！くっこそ！」

「数が多いよ！」

M16とSOP　IIの声が聞こえた

それと

「A1姉さん！ハイエンドモデル3人確認！一人がベルです！」

M16A2の声も――

「居た！ベルウウウ！！」

M16A1の声が響いた

「ベル、ここは任せろと言ったが……大丈夫か？」

「……………」コクコク

「そうか。気をつけろよ。エクスキューションナー！行くぞ！」

「……………」

「また会ったな…………ベル…………」

M16A1が居た。手もプルプル震えていた

「お前は……………これで良かったのか？お前が望んだことなのか？」

「……………」フリフリ

誰も、自分だって望んだことじゃ無い——ただ、自分は敵になってしまった。自分は、貴女達を殺さなくてはならない

「……………そうか、じゃあ、容赦はしないぞ？」

「……………」フフツ

それはこっちのセリフさ——

「あの時の再戦だ……………行くぞ！」

M16A1はナイフを構え、ベルもナイフを構えた

「ハア…………ハア…………」

「フウ…………フウ…………」

二人ともボロボロである

ベルの損傷は鉄の機械が少し見えるほどであった

「……………」ピーピー!!

警告音がうるさかった

M16A1も頭から人口血液が流れていた

「フツ……………ベル……………どうした……………?へばった……………なんて言わねえよな……………?」

「……………」フツ

抜かせ——そう思っている

「この勝負……………私の勝ちだ……………」

M16A1から——閃光手榴弾が投げられる

「……………」

しまっ——と思った時にはもう遅かった

M16A1がナイフを持って突撃してきた

「……………」

なんとか止めれたが、後少して刺されそうであった

「まだ、残っていたのか……………?だが、無意味だ!!」

ボコッ!!

ベルは思いっきりM16A1に殴られ

「……………」キーン

気絶してしまった

「ふう…………ベル、お前も大分強くなってるな」

M16A1は気絶したベルを持ち上げる

「…………寝顔は、敵になっても可愛いものだな。それが、幸せそうな顔か…………それと、肌白っ」

と言いつつ、M4の元に戻る

「M16姉さん！って担いでる人は…………？」

「ベルだよ…………正真正銘の」

「…………ベルさん」

「目を覚ましたら、一発殴らせてくださいいね？」

「M4…………どこでそんな事を…………」

「これもベルさんからの教えです♪」

「…………ベル、私からも言おう。一発殴らせろ」

第三十三話 自己喪失

「……………」

ベルは目を覚ますと、台の上に寝かされていた
ベルトで拘束されていた。手と足を

「起きましたかベル。だけど、これでやりやすくなる」

ブタノワ指揮官が居た

「そうか、捕まったんだな——」

「この薬は……少し危ないかもしれない。ただ、これも貴女を『治す』為だから
治す……か」

「その薬は、発作を引き起こすかもな」

M16A1が言った

ブタノワ指揮官は注射器をベルの目に向けてる

「中途半端では駄目です。脳内投薬を始めます」

「……なあ、それを目に射すのか？」

M16が心配するように言う

「大した代償ではありません」

と言いながら、注射器をベルの目に射した

「……………」

「ベル、鉄血の事、全て思い出して。この戦争を止められるのは、貴女のためだから」と、ベルの視界はホワイトアウトした

『ベル、エルダー・ブレインを知ってますか？鉄血を率いているボスです。姿は未だに分らないことが多いです』

「……………」

『貴女が鉄血に回ってからの敵の行動は過激なものになってます』

「……………」

「……………?」

目を開けると、台では無く、何故かそこは戦闘になっていた

『貴女の報告では、墜落したヘリの中に居た。生存者は鉄血の攻撃から身を守っていた』

ベルはライフルとSMGを取る

『貴女は走ってM16A1を構えた……または別の武器ではあるけど……』

目の前にはリッパが沢山居た

「援護を！」

「OK！」

自分も知らない人形達であった

そして、ある程度倒し、リッパは撤退した

人形達は全員倒れていた

『貴女は自分しか生き残っていると悟り、森の中を進んだ』

ベルは歩いていく

目の前には、鉄血の元基地があった。それと、赤い扉も

『そうですベル。それがバンカーです！開けて中に入ってください』

ベルは赤い扉を開けると、エージェントが居た

「皆さん、グリフィン共はご主人さまの大切なものを……」

で止まった

良いとこだったのに——ってそんな呑気なことを考えてる場合じゃねえなとベルは思った

目の前にはパソコンがあった。

それを開くと

『鉄血の情報について』

だった

「……………」

ベルは、エルダーブレイン……エリザの事を調べると

『エルダーブレイン、“エリザ” 鉄血最高幹部』

と出た。だが、ここから先は

『アクセスが制限されています』

と出た

同時に視界がホワイトアウトした

数分後……

「……………?」

「目を覚ました」

M16が最初に写った

「ベル、いい加減にして。エルダーブレインは何をするつもりだ? 奴はどこだ」

「……………」

何が起きた?

「今貴女が経験してる事は、真相の為です。戦争を終わらせるためのね」

「……………」

「ベル、今は私達の事が憎いでしょう。それも当然です。ですが、考えてください。これは貴女の為でも、私の為でもない。この無意味な戦争を終わらせるためさ。無差別に人間を殺し、自己忠義しか頭にない奴らを、止める為なのです。貴女の真相は、全て扉の向こうにあった。戦術人形に変わる際にも、ベルの記憶には同じ共通点があった。そして、最後に貴女が何者かを確立するチャンスが今この瞬間なのです。だから教えて。エルダーブレインの場所を」

『皆さん、グリフィン共はご主人様の大切なものを蝕んでいます。しかし、私達は弱体化する一方です。今、ここで行動するべきだと私は考えています。もうすぐ、人間が使っ

ていた特殊兵器を手にします。その兵器を手にしたら、クリミア半島の地下シエルターに退避し、それを打ち込みましょう』

「……………」

『クリミア半島のシエルター……………クリミア半島……………』

「クリミア……………半島……………」

「クリミア……………カリーナ！ヘリアンに報告して！全員用意して！決戦の準備です！」

　　ブタノワ指揮官はベルトを外す

「正しい選択をしましたね。皆と一緒に行きましょう」

第三十四話 決戦

『ベル！お前の右だ！』

M16A1の声が聞こえた

『ベリコフが装甲車を配備してるとはな！』

『この装甲車群で、鉄血の基地を襲撃することです！』

『分かっているよ指揮官！ベリコフが対地支援をしてくれる！』

と後ろとかを見ると、合計七台ぐらいの装甲車が走っていた

ドライバーは勿論グリフィンの運転手が

『よおベル！久しぶりだな！帰ったらウオツカ飲もうぜ！』

久しぶりのベリコフの声だった

『帰ったら私も混ぜてくれないか？』

『M16姉さん……』

「相変わらずね」

AR—15が隣りにいた

「ベル、貴女が敵に回ったことは今でも忘れてないわ。でも、この作戦が終わったら……
覚悟しておいてね？」

どつかで聞いたことあるようなセリフだが、ベルは分かっていた

『ワーオ、AR—15が起こり気味だ！』

「氏ね」

『酷い！』

SOP IIに言われたことに対しての返しが辛辣なAR—15

『つと、敵のお出ました！』

鉄血も動きが早かった。ニーマムが出ていた

『ニーマムだ！奴は装甲があるぞ！』

『こういう時こそベリコフだ！ベリコフ！航空支援を！』

『了解！発砲！』バラララララ！！

ベリコフのハインドがニーマムを吹き飛ばしていく

『よし！破壊した！いけいけ！』

『よし！全員撃て！』

ダダダダダ！！

他の基地の人形も参加していた

ベリコフのハイランドに乗って空挺降下する者に見覚えがあつた

AK—15——？

そして敵基地の防衛戦を突破し、敵基地前に到着すると

ガシッ！

「……忘れたとは言わせないぞベル？」

AK—15が居た

「全く……AK—15も忙しい子……あつ、AK—12よ。宜しくね」

「……………」

「噂通りの無口ね。でも強いことに変わらない」

「お喋りは後だAK—12。今は敵を始末するぞ！」

「ベルさん！」

G3の声でした

「変えの手榴弾とかありますか？」

ベルは手榴弾を渡す

「ありがとうございます！」

成程……これが総攻撃か……

凄いな——

「ベル？行くよ？」

SOP IIに心配された

「……………」

ベルはK r r g i 6を構え、基地攻撃をした

鉄血基地内部

「……………」

「部屋には誰も居ないわ……警戒して行きましょう」

AR—15と行動しているベル

味方は外で戦闘を続けている

『A1姉さん、ここにも居ません』

『A2、了解』

『こちらM4、ベルさんとAR—15と合流します』

と無線で話していると

『きましたね。グリフィンのクズ人形』

無線に入り込んできた聞いたことがある声

『私はエージェント。ご主人さまへの道は通しません』

第三十五話 対決、そして爆破

「では、ご覚悟を」

エージエントの声で、スカートを捲ると銃が四本出てきた

「全員隠れて！」

ダダダダダダダダダ!!

「どうしましたか？隠れていては何も始まりませんよ？」

と、ダミーも出てきた

「チツ……ダミーも出てきましたね……これは厄介です」

M4が舌打ちをする

「ベルお姉さん」

A2も居た

「こんな状況だけど……戻ってくれてありがとうね……」

「……………」

ほんとに今更だな――

「……………」

krig6で反撃するベル

その内の一発が、エージェントの武器に命中した

「ほう……当ててきましたね。だが、この程度!」

攻撃も激しくなった

「……………」

ベルはモロトフを投げると

「ああ……この!やってくれましたね!」

効果は有るみたいだった

ただ、怒りゲージが増えた気がする

「ベル!スモークグレネードだ!」

「……………」

ベルはスモークグレネードを投ると

「皆!突撃!」

M4の声で突撃を開始

「な!?!」

エージエントは対応できなかつた……が

「せめて、ベル！貴女は始末します！」

エージエントの撃った弾がベルの肩に命中した

「ヴツ……！」

「ベル!?!」

A R—15が止まり、ベルを抱えた

「……よし、倒した！」

M16A1がエージエントを倒した

ベルは、肩を撃たれた

「ベル……?」

「……………」コクコク

見ると、少しずつ治っていた

「す………凄いい」

「……………」

そして向かった……ボスが居る所に

「来た……グリフィンの連中が」

エルダーブレインは居た

「……もう知ってると思うから、自己紹介は不要だね」

「エルダーブレイン。今直ぐに鉄血の機能を停止しなさい」

「……………」

エルダーブレインは黙ったままだった

「止めろ」

M4は珍しくドスの利いた声でエルダーブレインに言った

『なあ、これもお前のせいかな?』

『……………』フリフリ

ベルは、教えたのはベリコフだろうと伝えた

『ベリコフ……お前も後で殴るからな』

と小声で言った

「さあ……でも、ボクは簡単には死なないんでね!」

と言うと、ヴェスピドの大群が現れた

ダダダダダダダダ!!

「危ない！」

「くっそく……」

「……………」

ベルは逃さなかった

63式步槍を構え

ダアン!!

『グツ!!』

の声が聞こえた

ヴェスピドは困惑してそうだった

「撃て！」

残党狩りの始まりだった

だが、少し邪魔が入った

『アハハく♪久しぶりくベルく?』

チツ、頭が逝つてるクソ野郎だ——

『酷いわねエ?でもお?貴女が裏切つてくれて良かったと思つてるわあ。またね』

と上から声がした

「あの時の殺し合いが出来るからねええ!!」

ドリーマーが上から襲ってきた

「そんな!こんな時に!」

敵の増援も到着した

「さあどうするベル!?私と一対一で殺し合うか!!仲間を犠牲にするか!!決めろ!今ここで!!」

選んだのは

M4、撤退させろ——

だった

『そんな!ベルさん!貴女を置いて行くなんて……!』

私は帰れそうにない……A2に宜しくと伝えてくれ——!!

と無線機を投げたベル

「ヒヒヒツ……さあ、殺し合いの始まりね!!」

「アハハ!!逃げてても無駄だ!私からは逃げられない!大人しく私に殺される!!」

おいおいあのクソ野郎。強くなつてないか——?」

予想以上に強くなっていたドリーマーに困惑しているベル

「……………」

モロトフを投げると

「ヒヒヒッ！ああ熱いわ!!でも、燃え尽きるならベルと一緒に!!」

と言っではいたが、消火した

「……………」

あいつ、自動消火装置でも付いてるのか？とベルは思った

「もっとお！お前の攻撃はその程度か!!」

ドリーマーは発砲し、ベルは躲したが

「……………!!」

自分の右手首だけは躲しきれず、手首が一撃で吹っ飛んだ

「ヒヒヒッ！ああ、ベル！手が無いベルも最高よ！片手だけでどうしようと言うのかしらあ!？」

とそのまま馬乗りになってきた

あつ、死んだ（^o^）／

すると

おい、あのクソ野郎に勝つぞ。ちよつと身体貸してくれ

は？誰だったっけ？

後でツツコむから。今は早く！

「……………ああ？」

ベルの瞳の色が変わった

そして

グサア！！

「アゝアゝ！！」

ドリーマーの首をナイフで刺した

「ガアアア……………ウウウウ……………」

どんどんイカれていくドリーマー

「……………」

ベルが冷酷になっていた

「アア……………ドリーマー……………ダツタカ？アイニクダガナ……………ココデシネ」

とナイフでドリーマーの身体を搔つ捌く

「イタイイタイイタイイタイイイイイイイ！！……………アア……………あ……………」

十文字にナイフでドリーマーを搔つ捌き、ドリーマーは行動を停止した

「ハハハ……………ザマアミヤガレ。ミウチヲキズツケタバツダ。オマエニハフサワシイモノ

ダ……ツト、モウジカンダ。ベル、カワルゾ？」

と元のベルに戻った

「……………」

十文字に搔つ捌かれたドリーマーがあつた

それと、自分の身体にも異常をきたしていた

『バッテリー稼働時間、残り四分』

……は？

スマン……サスガニツカイスギタ

てめええええ!!何してんだああああ!!

『ベルさん……大丈夫ですか!?!』

問題ない………と言いたいが、そっちは？

『鉄血の部隊と交戦してます!これから撤退します!ベルさんも』

いや駄目だ

『なんで……………!』

もうバッテリーも持たん……それに今来ても囲まれて死ぬだけだ

『そんな……!』

良いか?今からこの基地を爆破する。少威力だが、基地一つ破壊可能なミサイルがあつた。これを自爆させる

『そんな!今からそつちに!』

M4!行け!私に構うな!生きてここを出ろ!!

『うう……そ……そんな』

『ベル……覚悟はあるのか……?』

M16A1の声が聞こえた

勿論だ……後始末は私に任せろ……だから!行け!

『……分かつた』

『M16姉さん!』

『すまないM4……ベルが自分で決めた事だ……私達にどうこう言うようなことでは無い……それにベルはやることは必ずやる』

『ベルお姉さん……』

A2、済まないな……ペリコフに宜しくと伝えてくれ。短い時間だったが、ありがとう

『……行くぞ!ベル!施設爆破は何分がリミットだ!』

そうだな……三分だ

『分かった、迅速に撤退させる!』

『そんな……! ベルさん! ベルさん!!』

「全員撤退だ!」

M16A1が叫んだ

「M16! どういう事よ!」

「ベルが、施設爆破をする!」

「な! はあ!」

ネゲヴも戸惑ってるみたいだった

「爆発に巻き込まれる前に全員退避だ!」

『ベル……これで良かったのか?』

はは……何をいきなり……私は、落とし前をつける……それだけだ

『……………』

全員退避は終わったか？

『ああ……もう退避は終わった……後何分だ？』

後……一分だ

『……………』

「チツ、お前か、全ての元凶だな？」

アルケミストが居た

なにを……何だ？殺しに来たのか？

「フツ、裏切り者には死しかない。そうだろう？」

そりや確かにな………だけどな？死ぬのはお前もなんだよ

「どういう……意味……だ……」

ベルはボタンを押すと

リミット時間が思いつきり十秒に変わった

「な!?ベル!!」

ハハツ………さらばだ、グリフィン……

ドカーカーン

!!!!!!

「ああ……ベルさん……」

爆破されている鉄血の基地が見えた

「ベルさん……！ベルさん……！！」

ベリコフも見ていた

（ベル……お前は……裏切り者としての自覚はあった……そのツケを払ったのか……
？）

番外編

クリスマス グリフィンバージョン

「今日はクリスマスか……ベル、お前は何をするんだ？」

不意にベリコフにクリスマスに何をするかと言われたベル

「……………」

はて、クリスマスなんぞ今まで楽しんだことなどあるのだろうか——とベルは思った

「さてはなにもないな？……ハア、俺も生憎予定はない。ヘリを飛ばすぐらいでなにでもないからな」

「……………」

「じゃ、俺はこの辺で。極上のウオツカを飲んでくる」

グリフィンの基地の状況は、一番いいと言えるだろう

特にFNCは一番喜んでるみたいだ

「お菓子一杯ありますかね……？」キラキラ

と目を光らせながらベルに言った

「……………」コクコク

「そうですよね……！お菓子はたくさんある筈です！もう待ちきれません……！」

FNCは楽しみに待ってるみたいだ

「……………」

クリスマス……傭兵になってからそんな事も忘れていたな……

ベルは自分の部屋に一旦戻り、ベットで寝た

夢の中

「よお、久しぶり」

「……………」

夢の中の自分と会ったが、セーブハウスは完全にクリスマス一色だった

壁にもライトの装飾が飾られ、バンにはウオツカとケーキも（合うかどうかは知らん）ツリーもあつたが、根本には弾薬箱、木には薬莖が飾られていた

「にしてももうクリスマスだなベル。……少し早いが、メリークリスマス」

もう一人のベルはウオツカを上げる

「……………」

ベルはウオツカを取り、乾杯した

「プハア……甘え……ベリコフご自慢のウオツカは最高だな」

「……………」

どうやってベリコフご自慢のウオツカを？とベルは思っている

「俺は夢の中のお前だぞ？ウオツカの一つや二つなんて簡単に出せる」

「……………」

少々呆れていると

「ケーキ食うか？お前は意外と甘党だからな。チョコケーキだ」

「……………」

もう一人のベルは包丁を取り出し、綺麗にケーキを切ると皿に乗せてベルに渡した

「食え。これだけならもてなせるからな」

「……………」

ベルは手を合わせ、ケーキを食べた

「……………」

意外と美味しかった

「良かった良かった……これでマズいって言われたら落ち込むところだったよ」

「……………」

とベルはあつという間にケーキ一切れを完食した

「残りは本番用だぞ?」

「……………」 コクコク

すると

「つと、もう時間か。じゃあなベル。楽しんでこい」

と視界がホワイトアウトした

「ベルさん!起きてください!もう始まっていますよ!」

M4に起こされた

「それと、そのマスクも取ってください!早く!」

「……………」 アセアセ

ベルは直ぐに黒マスクを取る

「やっぱりベルさんはマスクを取ったほうが良いですよ？」

「……………」

ベルはノーコメントだった

「では、今日は楽しもう！メリークリスマス！」

ブタノワ指揮官がそう言う

『メリークリスマス！』

他の人形達も言った

「良いですね……クリスマスは」

M4が隣で言った

他の人形達は

「お菓子お菓子♪」

「FNC、食べすぎには気をつけてね？」

「分かってるよ……………」

「プレゼントだ！開けるの楽しみです！」

楽しそうだ

AR小隊の他の各々は……

「プハア……ベリコフもつと飲もうぜ？」

「M16……良いすぎや。少し休め」

「いやーだ……ヒック」

「全く……これだからM16は」

「わーい♪」

「SOP II、はしやぎ過ぎないようにね」

「そう言つてAR―15も楽しみたいんじゃない？」

「黙れ」

「酷い!!」

相変わらずだった

「ベルさん……いつまでも、宜しくお願いしますね」

と手を差し伸べて来た

「……………」

ベルも手を差し出し、握手をした

「何やってんの二人とも。こっちも楽しいよ〜！」

「……行きましようか」

「……………」コクコク

クリスマスの宴はまだ長い——